

賀茂季鷹手沢本「新和歌集」翻刻

小林 一彦

賀茂季鷹（本姓山本）の子孫、上賀茂社家山本家に伝来した典籍類の中から、「新和歌集」を翻刻するものである。

「新和歌集」は鎌倉時代の私撰和歌集である。全一〇巻、八七五首。関東の豪族宇都宮一族の歌人を中心に、一族に関係する歌人および和歌催事の詠作が収められている。宇都宮頼綱（蓮生法師）、朝業（信生法師）の兄弟をはじめ、頼綱が藤原為家の岳父であったことから、為家やその父定家、為氏（頼綱孫）、および藤原家隆・隆祐父子、藤原信実らが在京の有力歌人たち、神祇伯源顕仲の後裔で浄意法師（源有季）と浄意法師女ら都より下向した歌人の歌も存在する。また朝業が將軍源実朝の近習であり、実朝や後藤基政・基隆兄弟、大僧正隆弁ら柳営に重きをなした歌人や、河内本『源氏物語』の校訂で知られる源親行、『万葉集』研究に業績を残した仙覚、素暹法師（古今伝授の東常縁の遠祖）ら、関東に縁の深い人々の作品も収められている。このほか、為家に対抗した葉室光俊（真観）や衣笠家良の歌もあり、興味深い。

伝本は、これまで神宮文庫蔵甲本、同乙本、宇都宮二荒山神社蔵本、彰考館文庫蔵本、学習院大学国文学研究室蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本、群書類従所収本の完本七本と女性歌人ばかりの抄出本であるノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵本が知られていた。すべて同一系統に属し、異本と呼べるような伝本は

存在しない。

今回翻刻する山本家伝来の「新和歌集」は季鷹の手沢本である。袋綴、二冊。上冊は縦二七・〇センチ、横一八・九センチ。下冊は縦二七・一センチ、横一九・〇センチ。表紙は香色雲母引地に薄茶で小紋の朽葉をあしらう。料紙は楮紙。それぞれ前表紙の左肩に短冊型の白紙題簽に「新和歌集 上(下)」と墨書。上冊には右肩に「紅葉賀」の墨書があるが、これは季鷹が「源氏物語」五十四帖の巻名をもとに蔵書を分類整理していた名残である。上冊は全百二十丁、墨付は百十八丁で遊紙は前と後に各一丁。下冊は全百二丁、墨付百丁で遊紙は前後各一丁で上冊と同じである。字面高さ、一六・七センチ。詞書は四字下げ、また作者の位置がかなり上方から書き出されている。每半葉八行書き、ただし一部に七行、十行(下冊六九丁表)、十一行(下冊三〇丁ウ)の書写が混じる。上冊(一五丁ウから六二ウ)には朱筆による傍書や見せ消ち訂正、濁点が存する。また、一部に薄墨による傍書や見せ消ち訂正なども散見される。

該本は、これまで知られていた諸本と異同箇所を比較した時、やや孤立した本文を保持していた天理図書館蔵本に近い。天理図書館蔵本には、惜しむらくは本文料紙の切除による十五首の脱落が見られ、その点でも、天理大学蔵本に近い本文をもつ該本の出現は貴重である。

なお、諸本の詳細については拙稿「校本『新和歌集』(上)／(下)」(『藝文研究』五〇／五一、昭和六一・二二／六二・七)を参照されたい。

凡例

一、翻刻に際しては、原本の再現を心がけ、なるべくその面影を残すようにつとめた。改行、傍書、見せ消ちなどは原本の通りである。

一、旧字・異体字等は、原則として通行の字体に改めた。なお、「譚」「哥」についてはそのままとした。

一、明らかに誤写・誤脱と思われる箇所については右傍に（ママ）を付した。

一、虫損による判読不能箇所については□を用いて補った。

一、傍記、見せ消ちについては、朱筆は下に（朱）、薄い墨筆は下に（薄墨）と注記した。

一、なお、「巻第一春」（一五ウ）から「巻第四冬」（六一ウ）にかけて朱筆にて施された濁点については、

（濁点朱）と右傍に注記した。

一、空白は行数相当分を（二行分空白）のように示した。

一、半葉ごとに「」を用い、丁替わりについては、上冊下冊ごとの各丁数を漢数字で示した。

一、和歌の歌頭には連番を付した（新編国歌大観番号に同じ）。

〔付記〕貴重な伝来の御所蔵資料の翻刻を御許可下さった山下正義様・尹子様、並びに御教示賜った宇野日

出生氏、盛田帝子氏に心より御礼申し上げます。

新和調集卷第一

春歌

立春の心を

蓮生法師

1 いつしかとかすみもあらぬ^(へ朱)やまのはの
あさひよりこそ春は見え^(み朱)けれ

藤原泰綱

2 たちかはる春のけしきもあらはれて
みねのあさひのかけそのとけき

信生法師

3 あつさゆみはるきにけらしたかまとの
おのへのみやに霞たな引

浄意法師

4 氷るし谷の小川のわすれ水
いはまをとめて春はきにけり

右大弁光俊朝臣鶴岳社にて

講し侍ける十首哥に

藤原時朝

5 けふりたつむろのやしまのちかければ
わかすむかたやかすみそむらむ

題不知 蓮生法師

6 雪きえぬたかねもはるの色ながら
ふもとはかりにたつ霞かな

宇都宮神宮寺障子哥

京極入道中納言

7 かすめともまれにやは見るしら雪の
はるもふりしくみよしの、やま

百首の哥よみ侍ける中に

雪中若菜

藤原泰綱

8 白雪のきえぬ野はらをふみわけて
けふそわかなをつみはしめける

蓮生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言

9 春のくるけふのわかなもせりかはの
ちよのふるみちとしをつみつ、

館にて百五十番哥合し
侍けるに

藤原景綱

10 さと人の衣手さむみわかなつむ

あしたのはらに雪はふりつ、

証定法師

11 まきもくのやまはかすみてみゆきふる

こまつかはらにうくひすそなく

春はいつしかまうて、山里の

すまみむと申たる人の

もとへ

蓮生法師

12 春きてもあとなき庭の苔のうへに

こゝろときゆるゆきをみる哉

題不知 源長継

13 かきくらすけしきはおなしそらなから

あめになりゆくはるのあは雪

有尊法師

14 かきくらしふるとはすれとかつきえて
のころはこそその雪にそ有ける

藤原時朝よませ侍ける

五十首の哥中に

藤原基政

15 むめの花さかぬかきりはうくひすの

なきてのはるもあらしとそおもふ

源親行

16 雪の中にはふはるへのむめの花

それとも見えすなをかすみつ、

鎌倉右大臣家より梅を

おりて給とて

17 君ならてたれにか見せむわかやとの

のきはに匂ふ梅のはつはな

御返事

信生法師

18 うれしさも匂ひも袖にあまりけり

わかためおれるむめのはつ花

衣笠内大臣家に読てたて

まつりける三百六十首哥中

藤原時朝

19 色もかもあはれとそみるふるさとの

みかきかはらにほふ梅か、

藤原時朝稲田姫社にて十首

哥講し侍しに、夜梅薫風

藤原時家

20 あけはまつ風をしるへにたつねみむ

ねさめにかほるむめのはつ花

梅花薫風といふことを

坂上家光

21 とめゆかむたかすむやと、わかすとも

風をしるへのむめのはつ花

蓮生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言

22 さぎにほふ梅つの川の花さかり

うつるか、みのかけもくもらす

人の花をこひにおらせたり

けるに、おりてやるとて

浄意法師

23 おるそてにかほはと、めてむめのはな

いろはかりをや人にしられん

河辺柳

源親行

24 青柳のかけゆく水のふかみとり

あさせもしらぬはるの川なみ

夕霞 大中臣能範

25 みか月のおほろにみゆるかけろふの

あるかなきかにかすむそらかな

題不知 坂上道清

26 いかはかりやまのあなたもかすむらん

おほろに見えて出る月かけ

花のさくへきころ、雪の

ふり侍ければ

藤原時朝

27 うちきえしなをふる雪に山さくら
枝にこもれる花のおもかけ

百首哥中に

藤原泰朝

28 はつ春のこすゑにさえぬしらゆきは
花にさきたつ花かとぞ見る

山花 蓮生法師

29 芳野山みねにあさゐるしら雲の
かさなる色やさくら成らむ

源親行

30 しら雲のあとなきみねのかすみより
かせをたよりの花のかそする

鶴岳の杜十首哥に

藤原朝景

31 いかはかり人のこゝろをつくすらむ
花さくころのみねのしら雲

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原時家

32 雲はなをたえく見えしみよしの、
やまのまもなく花さきにけり

題不知 浄意法師

33 よしのやまいくきのさくらさきぬとも
はつ花まてのよそめなりけり

藤原景綱五十番哥合に、

朝望山花

橘友家女

34 みよしの、芳野、やまを今朝越て
まつわれはかりみつるはなかな

同哥合に、山路花

清原時季

35 たつねいるさくらは花にさきにけり
やまのすゑにかゝるしら雲

大江季房

36 かをとめてたつねはいりぬやまさくら
かへるみちにやしるへなるらむ

題不知 藤原言盛

37 雲とのみおもひやはてんやまさくら
ふきくるかせににははさりせは

藤原時朝よませ侍りける

哥の中に

丹波広長朝臣

38 かつらきや花こそ雲のよそならめ

かをたにをくれ風のたよりは

花哥とてよめる

藤原親朝

39 いくとせの春のすみかと成ぬらむ

よしの、おくの花のしたかけ

蓮生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言

40 おもひいつやをしほのやまのさくら花

かけし神代の春のむかしを

百五十番哥合し侍けるに

藤原景綱

41 いにしへの神代をかけてをしほやま

しらゆふはなのいままさくらし

証定法師

42 花の色のしらゆふかけてたまくしけ

みむろのやまに春かせそふく

鎌倉入道大納言家月次御会

藤原泰綱

43 さほひめのたむけのやまの春風に

雲にもなひく花のしらゆふ

題不知 藤原頼業

44 やま里の人にとは、やみやこより

ほかにもかゝる花やにほふと

道願法師

45 やまたかみ心のゆきておる花は

人に見すへきいへつとそなき

宇都宮神宮寺廿首哥に

浄忍法師

46 ちらぬ間にいさかへりなむやまさくら

さかりを後のおもひてにして

権律師謙忠

47 よしのやまみぬにもおしきなこり哉

きのふけふこそ花はちるらん

海辺帰雁

藤原頼業

48 松しまやをしまかさきのゆふなきに

かすあらはれて帰るかりかね

帰雁を

浄意法師女

49 春といへは花なきさとにゆくかりの

こゝろのうちやのとけかるらん

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原朝氏

50 帰るかりいかにちきりてはることの

花にわかるゝならい成らむ

照因法師

51 ゆくすゑもおなし春とやかりかねの

花にわかれをゝしまさるらむ

清原時高

52 おなしくはこしちの花のちらぬまに

かへらはいそけはるのかりかね

西円法師

53 ちらぬまにかへるは花のうきなまて

をしきわかれの春のかりかね

百首哥中に

信生法師

54 あしひきのかたやまきゝすうちはふき

つまこひすなり春の曙

藤原泰綱

55 かつらきや雲もさくらもわかぬまて

ひとついろなるはるのあけほ

56 あけわたるとやまの花にうつろひて

いろのちくさにたつかすみ哉

藤原景綱

57 あけわたる峰の霞のたえ間より

さくらにのこるいりかたの月

藤原景綱よませ侍ける哥に

藤原時盛

58 くもるともいか、いとほん春の夜の

月にあまきる花のしらゆき

題不知 平時重

59 さくら木のこすゑはかりやくもるらん

はなの雪ふる春のやま里

稲田姫社十首歌に

証定法師

60 かすみしくやまのをのへのさくらかり

ぬれこそぬれめ雪はふるとも

藤原時朝四十八首哥すゝめ

侍けるに

大中臣能範

61 雪とのみふるやみかさのやまざくら

さすがにぬるゝこのもとぞなき

水上落花

親成法師

62 みなそこのかけのちかふとみえつるは

こすゑの花のちるにぞ有ける

藤原景綱五十番哥合し侍けるに、

朝山花

坂上道清

63 すがはらやふしみのさとのあさと

はなのかむかふおはつせのやま

題不知 蓮生法師

64 今ぞしる春はたつぬるやまさとの

花よりほかのあるじ有とは

藤原俊定

65 おのゝ、えもくち木のそまのやまさくら

はなにいゑちをわすれぬる哉

西入法師

66 花故になをふるさとかへりきぬ

いのちぞよをばそむかざりける

鎌倉三品親王家に三百六十首

歌たてまつりける中に

藤原時朝

67 花みれば身のうれへこそわすれけれ
(濁点朱)
 のきはのさくらなをやうへまし
(濁点朱)、(朱)

百首哥中に

藤原景綱

68 わきかぬる雲と花とはやまざくら
(濁点朱)
 うつろふからぞいろを見せける

宇都宮神宮寺廿首哥に

源基氏

69 このころはたよりと人もおもふらん
(濁点朱)
 花ちりてこん春のやま里

丹波国長

70 ちらぬよりおもふにおつるなみだ哉
(濁点朱)
 あだなる花のうしろめたさに

題不知

蓮生法師

71 今よりはかくのみにほへさくらばな
(濁点朱)
 このはるばかりのどけきはなし
(濁点朱)

72 あだにのみおもひし人のいのちにて
(濁点朱)

花をいくたびをしみきぬらん
(濁点朱)

信生法師

73 やまざくらちりしく庭のなごりまで
(濁点朱)
 さそふあらしにまかせずも哉
(濁点朱)

落花浮水

想生法師

74 よしの河ながれのすゑのさと人は
(濁点朱)
 ちりての後や花をみるらむ

鶴岳社十首歌に

藤原景綱

75 ありてよののちはうくとも桜花
(朱)
 さそひなはてそはるのやま風
(朱)

藤原基政

76 ちりのこるはるもこそあれ有てよの
(朱)
 はてとない、そ花のきかくに
(朱)

花のちりがたになりけるを
(濁点朱)
 見侍て

藤原時朝

77 花の色をうつりにけりと見るほどに
(濁点朱)
 わが身さかりのすぎにける哉

岸藤 信生法師

78 さきにけりたれにみせましをくやまの
(濁点朱)
 いはがきぬまのきしのふちなみ

松間藤

源宗景

79 ふちの花さくやときはの松にだに
(濁点朱)
 はるくれかゝる色は見えけり

河辺款冬

80 やまぶきの花のしがらみせきもあへず
(濁点朱)
 はるくれて行あでのかはなみ

暮春

清原公高

81 ちる花のわかれのみかはおほかたの
(濁点朱)
 はるさへいまはくれがたのそら

藤原実好

82 おしめともよものあらしにちる花の
(朱)
 のこりすくなるくる、春哉

九条内大臣家へ三百六十首歌

たてまつりける中に

藤原時朝

83 ちりのこる木すゑの花をながむれば
(濁点朱)
 はるのひかすもすくなかりけり

題不知

藤原頼業

84 花もちり春もくれぬるやまのはに
(濁点朱)
 かすみばかりぞなをのこりけり

浄意法師

85 めぐりあふならひばかりをたのみにて
(濁点朱)
 ことしもはるにまたわかれぬる

(三行分空白)

新和調集卷第二

夏調

住吉社の会に

藤原時朝

86 花を見しそのこのもとをたちかへて
(濁点朱)
 なつぞきにけるころもでのもり

更衣

藤原泰重

87 今はとやひとへにかへむなつころも
(濁点朱)
 はなのたもとをよそになしつゝ、

藤原親時

88 たちかふる衣のそではうすけれど
(濁点朱)
 はるのなごりのふかくも有哉

題不知

清原公高

89 花ちるといとひし風のいつのまに
(濁点朱)
 そでにまたるゝ夏のきぬらん

藤原基政

90 まがへばやあをばまじりのさくら色に
(濁点朱)
 いまはうつきの花そめのそて

宇都宮神宮寺廿首中に、

隣家卯花を

91 春まではたゝなをざりのへだてかと
(濁点朱)
 見えしかきねにさけるうの花

神祭を

浄意法師

92 けふともをりはやつさじかしはぎの
(濁点朱)
 葉もりの神は神ならぬかは

蓮生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言

93 しのびねのときはの森の郭公
(濁点朱)
 まつほどにだに夏はしりにき

宇都宮神宮寺障子哥に

京極入道中納言

94 むらさめもふるのやまべのほとゝぎす
(濁点朱)

おもひすつべきすぎのかけかは

題不知

藤原重頼女

95 時鳥なをまちかぬるむらさめに

月さへやまをいでぞわづらふ

鶴岳社十首哥に

藤原時盛

96 いたつらにねをなくやまのほとゝぎす

まつにしなればつれなかりけり

藤原朝景

97 ほとゝぎすなくねまたるゝこよひ哉

そらかきくもるたびのまくらに

藤原景綱

98 有明の月にまてとやほとゝぎす

おのがなくねもつれなかるらん

題不知

源宗景

99 郭公うらみても猶またれけり

ねられぬ月の有明のそら

藤原親朝

100 人づてにことしもきゝつほとゝぎす

うき身をいとふはつねなりけり

坂上道清

101 ひとこゑにわれやせましほとゝぎす

まつとせしまのこゝろつくしは

蓮生法師

102 ほとゝぎすたがすむやどもあし曳の

やまのかひあるはつねきかせよ

源親行

103 わけきつるおなじやまのほとゝぎす

さととふくれもなきてすぐなり

冷泉前大納言家に百首歌たて

まつりけるに、夕郭公を

藤原時朝

104 しのべともたそかれどきやしるからん

なのりそめたるやまほとゝぎす

たいしらず
(濁点朱)

素暹法師

105

あし引のやまほと、ぎすやまにても
ほ(朱) (濁点朱)
なをめぐらしきはつねなりけり
(朱)

鎌倉右大臣家の御会に、

名所郭公

信生法師

106

こまやまのいしふむ峰のほと、ぎす
きく人かたきねをや啼らむ
(濁点朱)

藤原時朝稲田姫社にて講し侍

ける十首哥に

右大弁光俊朝臣

107

なきわたるつくばのやまのほと、ぎす
しるもしらぬもなべてきくなり
(濁点朱)
(濁点朱)

藤原泰綱

108

たづねてもつれなかりける郭公
かへるやま路に一こゑぞきく
(濁点朱)
(濁点朱)

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原清定

109

やまびこのこゑもかはらずほと、ぎす
いつれのかたをわきてきかまし
(濁点朱)
(濁点朱)

杜郭公

藤原時朝

110

いそぢあまりおいそのもりの郭公
なくねばかりはをとりしもせじ
(濁点朱)
(濁点朱)
(朱)

題不知

藤原重継

111

たづねきて袖そぬれぬるほと、ぎす
お(朱) (濁点朱) (濁点朱)
をのがなみだかもりのしづくか
(朱)

素暹法師

112

たびにしてきくは悲しきほと、ぎす
みやこにかはるねをやなくらん
(濁点朱)
(濁点朱)

大中臣能範

113

ほと、ぎすなくやま里にすむ人は
まつもまたぬもはつねきくらん
(濁点朱)

浄意法師

二三

三七

114 やまがつもたりにやはきくほとゝぎす
(濁点朱)
 まつのとほそのあけがたのこゑ
(濁点朱)

藤原頼業

115 よをすてばいらんとおもふやまのほに
(濁点朱)
 かねてかたらふほとゝぎす哉
(濁点朱)

円勇法師

116 すみわびてこゑたてつべきやまざとを
(濁点朱)
 なきてもいつるほとゝぎす哉
(濁点朱)

蓮生法師

117 かぎりなきなみだと見せてほとゝぎす
(濁点朱)
 お(朱)の(濁点朱)が(濁点朱)さ(濁点朱)つ(濁点朱)きの(濁点朱)あ(濁点朱)め(濁点朱)になく(濁点朱)なり
(朱)

弥陀信法師

118 ほとゝぎす人のこゝろをつくしきて
(濁点朱)
 お(朱)の(濁点朱)が(濁点朱)さ(濁点朱)つ(濁点朱)きの(濁点朱)そ(濁点朱)ら(濁点朱)になく(濁点朱)なり
(朱)

平幹繩

119 さみだれに月こそ見えねほとゝぎす
(濁点朱)
 やまよりいつるこゑ聞ゆなり
(濁点朱)

藤原景綱

「 二六

120 さみだれのそらによふかきほとゝぎす
(濁点朱)
 なにをうけくのとときとなくらん

藤原能季

121 あやめぐさねにあらわれてほとゝぎす
(濁点朱)
 さつき(濁点朱)き(濁点朱)ぬ(濁点朱)れば(朱)な(濁点朱)か(濁点朱)ぬ(濁点朱)日(濁点朱)ぞ(濁点朱)な(濁点朱)き
(朱)

出家の後、五月五日菖蒲の

ねにつけて人のもとへ申
 つかはしける

信生法師

122 おもひきや袖もあやめもひきかへて
 よをうきぬまのねをかけんとは
(濁点朱)

五月五日くすだまおこせ

たる人のもとより、そでの
(濁点朱)
 ぬるゝなど申たりける、
(濁点朱)

返事に

橘友家女

123 けふはみななくなるならひのあやめ草
(濁点朱)
 いかなるねにかそでのぬるらん
(濁点朱)

「 二九

菖蒲を

藤原基隆

124 ながきねのしづくながらやあやめ草
(濁点朱)

さつきのたまと袖にかけまし

五月五日によみ侍

大中臣景範

125 わがやどののきばにきなけほとゝぎす
(濁点朱)

けふのあやめのねをやつくしつ

蓮生法師八十賀屏風哥

冷泉前大納言

126 さみだれはしのにき舟の河やしろ
(濁点朱)

ぬれてほすべきなつごろも哉
(濁点朱)

山五月雨

丹波忠茂朝臣

127 ぬれてほすひまこそなけれをとめが
(濁点朱)

そでふるやまのさみだれのころ
(濁点朱)

浦五月雨

藤原景綱

128 ひかずのみつもりの浦のさみだれに
(濁点朱)

ほさでやあまのたまもかるらん
(濁点朱)

河五月雨

高階重氏

129 よしの河いはなみふかくなるまゝに
(濁点朱)

きしもそなるさみだれのころ
(濁点朱)

沼五月雨

照因法師

130 みごもりにからぬあやめやくちぬらん
(濁点朱)

いはがさぬまのさみだれのころ
(濁点朱)

だいしらす
(濁点朱)

大中臣能範

131 さみだれのくものいづくにいでぬらん
(濁点朱)

こよひはまたぬやまのはの月
(濁点朱)

夜盧橘

坂上道清

132 さみだれの雲まの月も身にしみて
(濁点朱)

はなたちばなのほふころ哉
(濁点朱)

宇都宮神宮寺廿首哥

淨忍法師

133 たちばなのそでのかたみとならざりし
(濁点朱)

むかしはなにのほひ成けん

鎌倉入道大納言家御会に、

隣家橘

源親行

134 あしがきのすゑこそ風のにほひきて
(濁点朱)

むかしもちかきやどのたちはな
(濁点朱)

たいしらす

信生法師

135 いろもかかたみなりけり白妙の
(濁点朱)

そでになれにしのきのたちはな
(濁点朱)

権律師隆快

136 いにしへをこふるなみだやふるさとの
(濁点朱)

はなたちばなの露と成らむ
(濁点朱)

藤原泰朝

137 すみあらずたがふるさとのあとならん
(濁点朱)

ひとりぞにはふのきのたちはな
(濁点朱)

百首哥に、夏夜易曙

藤原泰綱

138 くるゝかとおもひもあへぬみじか夜の
(濁点朱)

あけゆくそらに残る月かけ

夏浦月 道阿法師

139 みちか夜のおくるもしらず汲しほに
(濁点朱)

月かけはこふたこのあま
(濁点朱)

夏暁月

観念法師

140 こぎかへるうぶねのかぶりきえはて、
(濁点朱)

またかけみするやまのはの月
(濁点朱)

水上夏月

浄意法師女

141 はちす葉にをくしら露のひかりさへ
(朱)

涼しくみゆるなつの夜の月
(朱)

覚願法師

142 ちぎりおかむのちのよまでもととなれ
(濁点朱)

はちすのつゆもやとる月かけ
(にカ(朱)、(朱))

夏月如秋

坂上家光

143 秋きてはいかなるかげかまたそはん
(濁点朱)

かねてさやけき夏の夜の月

百首哥に、蛩を

源親行

144 とぶほたるひかりみだれてひさかたの
(濁点朱)

くもるにちかき秋かせぞふく

深更蛩火

藤原景綱

145 ほたるとぶなにはのこやのふくる夜に
(濁点朱)

たかぬあし火のかけもみえけり

水上蛩 坂上滋家

146 なにはえやあしまの水にかけ見えて
(濁点朱)

なみのしたにもとぶほたる哉

宇都宮神宮寺廿首哥に

源憲綱

147 山のはによこぎる雲のさはぐより
(濁点朱) わ(朱)(濁点朱)

けしきみえくるゆふだちのそら
(濁点朱)、(朱)

夕納涼

坂上家光

148 夏ふかきいはみの水のゆふすゞみ
(濁点朱)

まだこぬ秋ぞくみてしらる、
(濁点朱)

題不知 仏也法師

149 ひぐらしのなくゆふぐれのむらさめに
(濁点朱)

すゞしくおつるまきのしたつゆ

行路夕顔

藤原泰綱

150 たよりもみてこそすぎめたまほこの
(濁点朱)

みちのゆくてのゆふがほのはな
(濁点朱)

鎌倉入道大納言家御会に、

六月祓を

藤原時朝

151 みそぎするせいのいはなみをとたて、
(濁点朱) お(朱)

まだよひながらかよふ秋風
(濁点朱)

蓮生法師八十賀屏風哥に

冷泉前大納言

152 ゆふかくるたゞすの森にみそぎして

ちとせの秋のはじめをぞまつ

(三行分空白)

新和歌集卷第三

秋歌

百首歌中に、立秋を

藤原親朝

153 けふといへばすゞしくなりぬみわのやま

秋のしるべのすぎのしたかせ

藤原時朝五十哥に

藤原基政

154 おほあらかきのもりのした露いとはやも

草ばにをきて秋はきにけり

円嘉法師

155 ゆふさればをきそふ露にしろたえの

そでほしわふる秋はきにけり

題しらす

信生法師

156 故郷のみちのしば草しげりあひて

あとなき庭も秋かきにけり

藤原重頼女

157 人とはぬむぐらのかとはとつれども

露のやどりに秋はきにけり

九条内大臣家へ三百六十首哥

たてまつりけるに

藤原時朝

158 のきはなるおきふく風をたよりにて

ひごろおとせぬ秋はきにけり

稲田姫社十首哥に

右大弁光俊朝臣

159 はつ秋風ふきにけらしなかさほなる

おきのうは葉のをとたつるまで

- 源政家
 160 わがやどののきはのをぎにふく風の
(濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱)
 そよぐにつけて秋ぞしらるゝ、
 題不知 平光幹
(濁点朱) (濁点朱)
 161 みやぎの、草葉の露もわがそでの
(濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱)
 なみだも、ろき秋のはつ風
 蓮生法師
 162 しはのとやあだし心はむすびをかす
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 さそひなはてそ秋のはつかぜ
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 西入法師
 163 さよふけてすゝしくもあるかあまのがは
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 ゆきあひのはしの秋のはつかぜ
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 平忠幹
 164 あまのがはもみちのはしをいかにして
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 しぐれぬさきにわたしそめけん
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(位置マ)
 百五十番哥合に、深夜織女
 藤原景綱
 165 ゆきあひによやふけぬらんあまのがは
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)

「三

- とわたる風のそらにすゝしき
(濁点朱)
 証定法師
 166 かさゝぎのゆきあひのはしのなかそらに
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 きりたちわたり夜ぞふけにける
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 源行宗
 167 あふことはとしまれなるたなばたの
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 こゝろもしらずふるよはかな
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 暁織女
 安部泰弘
 168 こひわびしそのむつこともつきなくに
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 あげなんとするほしあひのそら
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 七夕後朝を
 藤原親時
 169 たなはたのかへるあしたはもるともに
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 たちやわかるゝあまのかはざり
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)
 藤原時朝すゝめの三十首
 哥中に
 権律師仙覚

「三

170 秋をまつあまのがはらのひと夜妻
(濁点朱)
 あさきりがくればち帰るらむ

蓮生法師八十賀屏風歌

冷泉前大納言

171 をらじたさかの、秋のはなざかり
(濁点朱)
 いろのちぐさ(濁点朱)にをけるしら露(朱)

稲田姫社十首哥に

藤原朝景

172 けさみればのべのちぐさのかずこと(濁点朱)
(濁点朱)
 をの(朱)がいろく花さきにけり(朱)

行路菽

藤原親朝

173 たび人のゆき、のをかの秋のいろを
(濁点朱)
 あもとにみする萩が(濁点朱)はなすり(濁点朱)

故郷菽

平忠幹

174 たかま(朱)ど(朱)のみやのむかしはうへつらむ(朱)
(濁点朱)
 今こそ(濁点朱)のべの秋は(濁点朱)ぎのはな(朱)

題不知 藤原泰綱
(濁点朱)
 みやきの、ふるみのこは(朱)ぎさきぬれば(濁点朱)
(朱)
 いろにうつろふ秋のしら露

平時重

176 ひとり(濁点朱)のみながむるやどのこは(濁点朱)ぎ原(濁点朱)
(濁点朱)
 さてやちりなん秋か(濁点朱)ぜそ(濁点朱)ふく(濁点朱)

蓮生法師

177 お(朱)く露のあたのおほ(濁点朱)のにさくは(濁点朱)ぎの(濁点朱)
(朱)
 はなもてちらす秋か(濁点朱)ぜそ(濁点朱)ふく(濁点朱)

浄意法師

178 風のをとをあはれとおもふ(濁点朱)なみだより(濁点朱)
(濁点朱)
 みだれ(朱)そめぬる秋のしら露

宇都宮神宮寺廿首哥

謙基法師

179 したを(濁点朱)ぎのすへ(朱)ばみだ(濁点朱)れてふくか(濁点朱)ぜに(濁点朱)
(濁点朱)
 そでよりおつる秋のしら露

証蓮法師

180 あはれとはよそ(濁点朱)にきくべき風のをとを(朱)
(濁点朱)

- 181 さとはあれてふりゆく庭の萩のはに
とふべきものと秋風ぞふく
(濁点朱)
萩風
藤原重頼女
- 182 ゆふぐれのまがきはやまのしたかけに
やどりしらする秋かぜのこゑ
(濁点朱)
坂上道清
- 183 吹かふるをとこそなけれ秋ことに
かなしきま、のおぎのうはかせ
(朱)
源長継
- 184 数ならぬ身にもこゝろはありけりと
おもひしらするおぎのうは風
(朱)
証意法師
- 185 山かげにうへしおくてはつれなくて
まづほにいづるしのゝをずゝき
(濁点朱)
藤原基隆

「四三

- 186 ながめむとうへてしものを花ずゝき
しげらばしげれ庭もまがきも
(濁点朱)
刈萱
藤原親長
- 187 秋といへば露をかさねてかるかやの
おもひみだれぬゆふぐれぞなき
(濁点朱)
秋夕
藤原基政
- 188 なべてよにものゝあはれをしることも
秋のゆふべやはじめ成けり
(濁点朱)
藤原時朝
- 189 あはれよのうきもつらきもしることは
秋のゆふべぞたよりなりける
(濁点朱)
藤原蔭清
- 190 今ぞしるおはながもとの草の名は
あきのゆふべのこゝろなりけり
(朱)
大中臣光成
- 191 おほかたの秋のあはれはさをしかの
つまよぶやまのゆふべ成けり
(濁点朱)
平忠幹

「四三

192 そのこと、おもひさだめぬなみだこそ
あきのゆふへのあはれ成けり

(濁点朱)
清原時季

193 さびしさはむかしもかくやいそのかみ
ふるきみやこのあきのゆふぐれ

(濁点朱)
藤原親朝女

194 ちゝにおもふこゝろぞ色にいでぬべき
しのだのもりの秋のゆふぐれ

(濁点朱)
坂上滋家

195 あくがるゝ心よいかになりぬらむ
身にこそそはね秋の夕ぐれ

(濁点朱)
藤原景綱

196 おばすてや月みぬさきのこゝろだに
なくさめかねつ秋のゆふぐれ

(濁点朱)
西門法師

197 なかむれば雲のはたてもさびしくて
そらに物おもふあきのゆふぐれ

(濁点朱)
宇都宮神宮寺障子歌

壬生二品

198 春日山あさるる雲のあともなく
くるればすめる秋の夜の月

(濁点朱)
蓮生法師八十賀屏風哥

199 雲もなくふけにけらしな久かたの
月のかつらの秋のはつかぜ

(濁点朱)
冷泉前大納言

百首に

200 秋かぜの夜さむになればあまのがは
とわたる月のかげぞさびしき

(濁点朱)
藤原泰綱

平光幹

201 あまつそらよものあらしに雲消て
ひかりのこさぬ秋の夜の月

(濁点朱)
藤原景綱

202 かりがねのきこゆるやまのたかねより
あさかぜさむくいつる月かけ

(濁点朱)
藤原時朝すゝめ侍哥に、

山家月

浄意法師

203 柴の戸やかかけひの水にかけ見えて

(濁点朱) のさばをめぐるやまのはの月

鎌倉入道大納言家月次御会に、
深山月

藤原時朝

204 いはねふみかさなる山のおくまでも

(濁点朱) すみけるものはあきのよの月

二条右兵衛督中将ときこえし

時、鶴岳社にて五十首哥講し侍けるに、
山路月

藤原泰綱

205 こえかゝる山路のすへはしらねども

(濁点朱) なかきをたのむ秋の夜の月

同会に、海辺月

206 みなとこす入江のなみの引くしほに

(濁点朱) 行かた遠きつきのかげかな

百首哥中に

蓮生法師

207 さとのあまのなみかけ衣よるさへや

月にもあきはもしほたるらん

野月 清原時高
(濁点朱) ゆふさればたま、くくずにく露の

ひかりをそふる野辺の月かけ

208 坂上家光

(濁点朱) 露むすぶ野はらの萩の色ながら

(濁点朱) たもとにうつる夜半の月かけ

故郷月 浄意法師

210 ふるさとにひとりいくよをながめきぬ

(濁点朱) しのぶにくもるのきのつきかけ

山鹿 源宗景

211 秋きてもあきとはみえぬときはやま

いつとしりてやしかの啼らむ

なすのへ、かりしにまかり

けるみちにて

藤原親朝

212 さをしかのやまぢにかへるあとなれや
すその、はらの露のむらぎへ
(濁点朱) (濁点朱) (朱)

蓮生法師

213 秋はぎのささちる野辺のあさ露に
ほ(朱) (濁点朱)
なをたちぬれて鹿ぞなくなる
(朱)

藤原泰綱

214 たかさこのおのへいきりにたちぬれて
つまをこめたるさをしかのこゑ
(濁点朱) (朱)

遠鹿 高階重氏

215 はるかなるふもとの里にきこゆなる
みねによぶかきさをしかのこゑ
(濁点朱) (濁点朱) (朱)

野鹿 藤原泰重

216 さをしかのながき夜すからこゑたて、
あけての、ちやのべのくさぶし
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)

槿花を 浄意法師

217 秋ごとかはらぬ色をながめても
はかなきものはあさがほのはな
(濁点朱) (濁点朱)

権律師仙覚

218 あさがほのゆふかけまたぬ花にこそ
さだめなきよはいとゞしらるれ
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)

山家槿花

源長継

219 庭のおもはひかげもさ、ぬ谷のとに
さかりひさしきあさがほのはな
(濁点朱) (濁点朱)

百首歌中に

信生法師

220 あさなくをく露さむしたかまとの
の辺の秋はぎうつろひにけり
(濁点朱) (朱)

蓮生法師

221 かり啼て萩のしたはのいろつくは
わがそでよりやならひそめけん
(濁点朱) (濁点朱)

藤原景綱

222 きえあへぬ萩のうは葉のあさ露は
なみだと見せてかりはきにけり
(濁点朱) (濁点朱)

蓮生法師

223 かりがね(濁点朱)のなみたやかかけて見えつらん
草葉(濁点朱)にむすぶ露(濁点朱)のたまつさ

鶴岳社十首哥に

藤原朝景

224 初かりのこゑもほのかにきこゆ也
きりたちわたるあけぼの、そら(濁点朱)

だいしらず(濁点朱)

浄意法師

225 あま小ふね(濁点朱)はつかりがねも時しあれば(濁点朱)
こゑ(濁点朱)ほ(濁点朱)にあ(濁点朱)げてな(濁点朱)きわたるなり

藤原基政

226 帰るさにはなをみすてしうらみまで(濁点朱)
月(濁点朱)にはれたるはつかりのこゑ

清原公高

227 秋(濁点朱)かぜ(濁点朱)にまつとしりてやはつかりの
いなば(濁点朱)のやまのみねになくらん

冷泉前大納言家に百首みせ
たてまつり侍りける中に

228 ひさかたの雲の衣をかりがね(濁点朱)の
つばさ(濁点朱)にかけて秋はきにけり

藤原時朝

あさ(濁点朱)とい(濁点朱)で(濁点朱)のころも(濁点朱)でさ(濁点朱)む(濁点朱)み(濁点朱)かりがね(濁点朱)の
きこゆるそら(濁点朱)に秋(濁点朱)かぜ(濁点朱)ぞ(濁点朱)ふ(濁点朱)く

信生法師

229 行路秋 藤原経光(濁点朱)
行末(濁点朱)のふもとのをば(濁点朱)な(濁点朱)う(濁点朱)ち(濁点朱)な(濁点朱)び(濁点朱)き(濁点朱)
あさ(濁点朱)きり(濁点朱)はる、野辺(濁点朱)の秋風

秋夜雨 藤原景綱(濁点朱)

230 吹まよふ(濁点朱)あらし(濁点朱)の風(濁点朱)にたく(濁点朱)ひ(濁点朱)きて(濁点朱)
ね(濁点朱)ざ(濁点朱)め(濁点朱)にかゝる秋(濁点朱)のむら(濁点朱)さ(濁点朱)め

秋、やま(濁点朱)ざ(濁点朱)と(濁点朱)より人(濁点朱)のもとへ申

231 つかはしける

蓮生法師

232 かせ(濁点朱)ふ(濁点朱)けば草葉(濁点朱)にもろ(濁点朱)き露(濁点朱)をみよ
みやま(濁点朱)の秋(濁点朱)のそで(濁点朱)にま(濁点朱)がへ(濁点朱)て

233 なみだ(濁点朱)のみ身(濁点朱)にそふ山(濁点朱)のふか(濁点朱)き(濁点朱)よ(濁点朱)に

月もはなれぬ秋のそらかな

鶴岳社十首歌に

西円法師

234 あるをこそなくさめつらめあぢきなく
(濁点朱)

なきおもひさへ月のそふらむ

題不知 坂上道清

235 身のうきもわすれやするとながむれば
(濁点朱)

なをそでぬらす秋のよの月
お(朱) (濁点朱)

宇都宮神宮寺廿首哥

浄忍法師

236 なみだのみくもるならひとしられなば
(濁点朱)

うき身を秋の月やいとはん

藤原時朝館の会に、月を

源孝行

237 いそぢあまりなれこし秋もしられつ、
(濁点朱)

くまなき月においぞかくれぬ
(濁点朱)

題不知 藤原時家

238 むそぢまで見るべききものとおもひきや
(濁点朱) (濁点朱) (濁点朱)

こゝろの外のあきのよの月

藤原泰綱

239 さてもよにおもふこゝろやのこらまし
(濁点朱)

みざらむのちの秋の夜の月

円智法師

240 あたらよのあめのうちにぞ更にける
(濁点朱)

入かたはるゝやまのはの月

大中臣能範

241 一つのまにくまなきそらのしくれつ、
(濁点朱)

はるゝもやすき秋の夜の月

親成法師

242 あかで入月にそへつるこゝろこそ
(濁点朱)

かけてなりても行めぐりぬる
(濁点朱) (歟) (朱)

円勇法師

243 わきてみむいくよもあらじなか月の
(濁点朱) (濁点朱)

はつかにあまるやまのはのつき

鎌倉三品親王家の十首御会に

月前擣衣

源親行

244 こゝろなきし(濁点朱)つはた衣おりはへて
(濁点朱)うたずばよはの月にねなまし

里擣衣 藤原時盛

245 お(朱)をとなしの里とはいはじすむ人の
(朱)あればやいまもころもうつらん

百首哥中に、山家擣衣

想生法師

246 秋風やさむく吹らんし(濁点朱)がらさの
 とやまのさとに衣うつなり

題不知 藤原景綱

247 なきあかすの(濁点朱)ばらのむしのおもひ草
(濁点朱)をばながもとや夜さむなるらん

宇都宮神宮寺甘首哥に

謙基法師

248 秋の夜のながきおもひはおとらぬに
(濁点朱)われのみとなくきりくす哉

題不知 西仁法師

「 五六

249 かなしさは秋のならひぞきりくす(濁点朱)
(濁点朱)おもひしのびてなかずもあらなん

平経成

250 古郷のかきはあれてやきりくす
(濁点朱)ふかきよもぎの露になくらん

清原公高

251 今はやあさちがはらもかれく(濁点朱)に
(朱)むしのねよはる秋かぜぞ吹

有尊法師

252 啼かはずあさちが庭のむしのねに
(濁点朱)なみだをそへぬゆふぐれぞなき

源親行

253 たまくらによはりなはてそきりくす
(濁点朱)なみだの露はしも、むすばす

成願法師

254 お(朱)をく露にあさちがはらはうらかれて
(朱)さびしくなりぬまつむしのこゑ

藤原国弘

「 五七

- 255 ゆふさればあはれみにしむあき風を
(濁点朱)
 うらみがほなるまつむしのこゑ
(濁点朱)
 顕信法師女
- 256 しぐれにもつれなき色はのこりけり
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
 あをばまじりのみねの紅葉は
 蓮生法師
- 257 もみちはに日のかげやのこるらん
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
 したてるやまの秋のゆふぐれ
(濁点朱)
 建長三年九月三島社哥合に
 藤原時朝
(濁点朱)
- 258 とやまなるならのましばのいろづきて
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
 よさむに秋のなりまさるかな
 宇都宮神宮寺障子哥に
 京極入道中納言
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
- 259 秋にあへずいろづきそめし立田やま
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
 いまはしぐれのそめぬ日ぞなき
 題不知 浄意法師
(濁点朱)
- 260 いかにして月のかつらのもみづらん
(濁点朱)

— 五 —

- くものあなたはしぐれしもせじ
(濁点朱)
(濁点朱)
 藤原泰綱
- 261 しぐれ行ひかずにそへてかたをかの
(濁点朱)
(濁点朱)
 もりのこの葉はいろまさりけり
 藤原景綱
(濁点朱)
- 262 時雨するいくたのもりのもみち葉は
(濁点朱)
(濁点朱)
 とはれんとてや色まさるらむ
 想生法師
- 263 おしなべて時雨にけりなあし引の
(濁点朱)
(濁点朱)
 やまのはごととにいろまさりゆく
 玄長法師
- 264 はつしぐれふるからをのに秋更て
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
 ならのはがし葉色つきにけり
 清原時季
(濁点朱)
- 265 初時雨いかにそむればたつたやま
(濁点朱)
(濁点朱)
(濁点朱)
 みねのもみちのいろまさるらん
 蓮生法師
- 266 ときはやまいはねにのこるした紅葉
(濁点朱)

— 五 —

267 ふきもわすれよこがらしのかぜ
(濁点朱)
 秋といへばしのびもあへずしのぶやま
(濁点朱)
 色にいで、もちる木の葉哉
(濁点朱)

信生法師

268 ちはやふる神なみ山の秋かぜに
(濁点朱)
 きしのもみちやぬさとちるらむ
(濁点朱)

源基氏

269 このはちるいわせのもりを見わたせば
(濁点朱)
 ならしのおかも秋かぜぞふく
(朱)
(朱)

清原時高

270 見るまゝにちゞのはもりの神さびて
(濁点朱)
 しのだのもりに秋ぞくれぬる
(濁点朱)

藤原泰綱

271 をしめどもとまらぬ秋のなごりまで
(濁点朱)
 なをしたはるゝゆふぐれのそら
(朱)
(濁点朱)

新和歌集卷第四

冬歌

百首哥よみ侍ける中に、
 初冬を

藤原泰綱

272 神なびのもりのこのはもかつ散て
(濁点朱)
 しぐるゝそらに冬はきにけり
(濁点朱)

蓮生法師

273 みやまべの秋にわかるゝそでのうへに
(濁点朱)
 やがてふりぬるはつしぐれ哉
(濁点朱)

山家時雨

西入法師

274 はつしぐれきのふもけふもしがらきの
(濁点朱)
 とやまのさとに冬はきにけり
(濁点朱)

夕時雨

藤原実好

275 雲まよふゆふへのそらの風さえて
(濁点朱)
 しくれてさむみ神な月哉
(朱)
(濁点朱)

暁時雨を

権少僧都明愉

276 夜もいまはあけぬとおもへとあし引の

やまかきくもりふるしくれかな

海辺時雨

藤原親長

「三

277 おきつかせよそのむら雲さそひきて

あまのとまやにしくれふる也

題不知 蓮生法師

278 雲ちかきみやまのいほのしるしとて

しくれのをとのことにはけしき

行円法師

279 雲まよふゆふへの風と見しほとに

この里までもしくれきにけり

藤原基隆

280 なかそらにうきたる雲のいつくより

風にまかせてなしくかれきぬらん

鶴岳社十首哥に、故郷時雨を

藤原景綱

281 たかさこのおのへの宮のゆふしくれ

やまもとかけてふらぬ日もなし

後久我太政大臣家に三百六十首

哥みせ奉りける中に

藤原時朝

「三

282 よの中をあきはてしよりむら時雨

ふるはわか身のなみた成けり

題しらす

坂上道清

283 あらし吹庭のこのはのふるさにと

しくれせぬよもそてはぬれけり

藤原重継

284 時雨つゝやまのこのはのふるさとは

あかすちれとやあらしふくらん

河上落葉

藤原時朝

285 もみちはのなかれていつるみなとかは

これやしきのうらといふらむ

題しらす

浄意法師

286 吹すくるをとほひとつにたくひきて

よはるあらしにちる木のは哉

藤原泰綱

287 あらしやまさそふもみちやうつるらん

ふもとのさとはみちまよふなり

想生法師

288 もみちちるあらしのやまの月かけは

しくるとみえててりまさりけり

藤原仲兼

289 やまかせやのこるもみちをはらふらん

こかけくもらぬ冬の夜の月

坂上道清

290 さゝなみやひらのたかねにこからしの

うみやまかけてちるもみち哉

藤原朝景

291 やまかはの水は木のはにうつもれて

そらにのみすむふゆの夜の月

「六四

藤原朝氏

292 なかきよのまたあけやらぬ柴の戸の

ねざめにさむきこからしの風

謙基法師

293 初霜のけさいろくに見えつるは

うつろふきくにをけは成けり

藤原時盛

294 をのつから秋見しいるもなかりけり

しものしたなる庭のしらさく

百首歌に

蓮生法師

295 ゆふかりにとりふみたつるならしはの

はをとまきれてあられふるなり

蓮生法師八十賀屏風風哥

冷泉前大納言

296 風さむみうちをあしろさひをへては

いさよふなみもかつこほりつ、

宇都宮神宮寺廿首歌に

「六五

「六六

浄忍法師

297 瀬たえしてなかれもやらぬふるかはの
みさひなからにつらゝゐにけり

題不知

尼西蓮

298 まきもくのあなしの川や氷るらむ
もりくるみつのをとむせふ也

平光幹

299 よしの山はなよりのちのさひしさを
けふなくさむるみねのはつゆき

証定法師

300 ふる雪は花とまかへとよしのやま
はるよりさきにとふ人そなき

深山初雪

坂上家光

301 このはにも絶てひさしき深山路を
なをふりうつむけさのはつ雪

百首哥に

蓮生法師

302 ときはきのしけきみやまにふる雪は
梢よりこそまつもりけれ

藤原泰綱

303 はれやらてときしもわかすふる雪の
つもりてたかきふしのしはやま

鶴岳社十首哥に

藤原景綱

304 いかはかりみゆきふるらしかひかねは
さやにもみえず雲のかゝれる

山雪を

清原時季

305 草も木も春にしられぬ花咲て
雪にときはのやまなかりけり

権律師仙覚

306 花ならばさかぬこすゑもましまし
なへて雪ふるみよしの、やま

仙風法師

307 しらゆきのきえぬかきりはむはたまの

くろかみやまもなのみなりけり

故寺雪

権少僧都明倫

308 ふもとはあか井の水もあらし山

むすふこほりにつもるしらゆき

山家雪

藤原泰重

309 かりそめにむすひしはの庵なれと

雪ふるさと、なりにけるかな

故郷雪

橘友家女

310 をのつからとひこし人もしら雪の

ふるさといまはあとたえにけり

百首哥中に

坂上道清

311 しからきのとやまもふかくふる雪に

ひはらかおくを思こそやれ

「

「 六

京極中納言家へ千首哥みせ

たてまつりける中に

藤原時朝

312 ふる雪にうつもれゆけはしはのとを

た、くあらしのをとつれもなし

題不知

西善法師

313 月かけのさすにまかするしはの戸を

た、くやみねのあらしなるらん

信生法師

314 とふ人のあとなきやとのさひしさも

にはの雪にそあらはれにける

藤原泰朝

315 さをしかのあとばかりしてやまさとの

雪のあしたはさひしかりけり

源親行

316 ふる雪にみつのむらあししたをれて

をともかれ行冬のうらかせ

「 七

「

丹波広長朝臣

317 そことたにけふりもみえず白妙の

ゆきのしたなるしほかまのうら

蓮生法師

318 こぬまでもみちある程はまたれけり

おもひたえたるやまのしら雪

藤原基政

319 ふみわけてもみちのあとも見えぬまで

またふりかくす庭のしら雪

権律師隆快

320 いにしへのあとふみつくる雪のうちに

あはれもふかしをのゝやま里

山路雪

藤原朝氏

321 かよひこしあとふりうつむ雪の中に

ふみたかへたるいはのかけみち

樵路雪

清原公高

322 みちそとは心あてにやわけつらん

ゆきよりいつるふゆのやま

沼水鳥

安部泰弘

323 ちりつもるやまのこのはにかくれぬの

そこともしらぬをしのひとりこゑね

月前水鳥

近阿法師

324 雲かるといとへはやかてすきにけり

月によきるあちのむらとり

河水鳥 平忠幹

325 みなと風さむきゆふへのしほさひに

いはかはのほるかものむらとり

宇都宮神宮寺廿首哥に

神行郊

326 あしのねのしけきいりえの水とりは

したやすからぬねをやなくらん

河辺千鳥

信生法師

327 月かけもきよきはらにしもさえて

よやふけぬらんちとりなくなり

藤原景綱

328 しもふかきいはかきこすけふみ分て

かよふかはへにちとりなくなり

賀茂在忠

329 風わたるむつたのよとのかはちとり

なくねもさむし冬のゆふくれ

海辺千鳥

藤原泰綱

330 さよころもさえ行袖のしほかせに

ことうらかけてなくちとりかな

丹波忠茂朝臣

331 うなはらやなこのしほひのはま千鳥

なくねもさえてうらかせそふく

磯千鳥

清原公高

「三

332 ありあけの月かたふきて松しまや

をしまかいそにちとりなくなり

夕鷹狩

行円法師

333 かりくらすかたの、き、すきこゆなり

ふみのこしたる草はなけれと

神楽

座蓮法師

334 庭ひたくあたりもさゆる冬のよに

しものしらゆふかくるさかきは

題不知

信生法師

335 おいぬれはやすくもとしのくる、かな

むかしもをなし月日なれとも

源宗景

336 あはれわかいのちのほとをおもふにも

すくるはおしきとしのくれかな

浄意法師

「四

「五

337 ゆくとしをいまいくたひかをしむへき

身なからしらぬいのちなりけり

藤原時朝

338 ゆくとしのけふもくれなはますか、み

うつりしかけもなをやかはらん

歳中に春のたちけるつこ

もりによみ侍ける

浄意法師

339 あやなしや

けふをかきりの

ことしたに

おもへははるのひかりかす

なりけり

(一行分空白)

「 六

新和調集卷第五

賀哥

百首哥に、寄鶴祝

藤原泰綱

340 あまのはら雲井のたつの声ながら

そらにもちよのはしめをそしる

八十賀し侍し時の哥に

蓮生法師

341 のりのみちあとふむかひはなけれども

われもやそちの春にあひつ、

冷泉前大納言

342 はかりなきいのちはやそちたまちきぬ

すゑのみのりのよるつよも見よ

土御門大納言

343 やそちまでひさしくへたる年のをの

なかきかひある春にあふらし

権中納言

344 めくりあふかきりもしらぬ春なれば

やそちのすゑもなをそひさしき

「 七

左京権大夫信実朝臣

345 わかよはひ君かやそちにおよふてふ

なをゆきつれの千代をまちける

左中将経定朝臣

346 やそちふるけふをちとせのはしめにて

なをゆくすゑのほとそひさしき

少将内侍

347 なをも又千代のよはひのしるき哉

いまのやそちのこゝろならひに

弁内侍

348 はるかなる人のよはひをかそふれは

かつくいまそやそちなりける

下野

349 かそへしるやそちのみねのまつかせに

なをよろつよとやまそこたふる

法印長恵

350 にしの山やそちのさかはたかくとも

なをのほるへきみねそはるけき

日吉祢宜成茂

351 神にいのるやそちのかすはおいらくの

よろつよふへきはしめなりけり

稲田姫社十首哥に、

寄神祇祝

藤原時朝

352 君かよもわかよのすゑもひさかたの

あまくたります神そまもらん

寄河祝

平朝定

353 みなかみもなかれのすゑもすみた川

にこらぬみよのためしなりけり

藤原時朝在京の時會し侍けるに、

寄神祇祝

惟宗行経

354 たまつしま神のうけるしるしとて

いろある人やひかりまさらん

題不知

想生法師

355 いそのかみふるのやしろのさかきはの

いろもかはらぬ君かみよかな

顯信法師女

356 わかきみのときはかきはのためしとや

神よのさかきおりはしめけむ

寄月祝

源宗景

357 くもりなき月もちとせの幾めぐり

君かみかけと、もにすむらむ

寄松祝

藤原真義

358 君か代のとけき春の色そひて

みとりそふかき野辺のわか松

浄意法師女

359 神代よりおもへはひさしすみよしの

まつをやきみかためしにはせん

神祇歌

少将にて宇都宮へくたり侍

けるついでに、白川関見侍て

権中納言

360 白川のせきのあるしのみやはしら

たかよにたてしちかひなるらむ

題不知

有尊法師

361 白川のせきもる神もこゝろあらは

わかおもふことのすゑとほさなむ

日光山にて神祇哥よみ侍

ける中に

権律師謙忠

362 すへらきのおさまるみよをおもふにも

くにとこたちのすゑそはるけき

363 しるらめやとよあしはらのあしかひの

ひらけてなれるくにつ神とは

364 世をてらすひのひかりこそ長閑なれ

神のなにおふ山のかひより

- 365 あつまちやおほくのゑひすたひらけて
そむけはうへのみやとこそさけ
(ママ)
- 宇都宮にくたりて侍けるに、
当社三所大明神はたひ人を
あはれみ給とき、て、宝殿の
はしらにかきつけゝる
- 藤原仲兼
- 366 たひ人のこゝろやすめよちはやふる
みところ神もさそちかふなる
- 三輪の社にて
- 蓮生法師
- 367 ふりにける神代のすきはそれながら
たつぬる人やかはり行らむ
- 修行の時、大神宮へまいりて
- 信生法師
- 368 としふともいろはかはらし神風や

- いすゝかはらの水のしらなみ
賀茂のみあれにまいりてよみ
侍ける
- 藤原時朝
- 369 そのかみにこゝろをかけしあふひくさ
けふのみあれにかさすうれしさ
- 題不知 座蓮法師
- 370 神山やけふのかさしのあふひくさ
かくるたのみの行ゑしらせよ
- 覚願法師
- 371 いくとせか波のしらゆふかけつらむ
きしへにたてるすみよしの松
- 鶴岳社十首哥に
- 藤原朝景
- 372 すみよしの神のいかきはふりながら
いつもかはらぬまつのみらたち
- 題不知
- 藤原親時

373 すみよしのまつのみとりはかはらぬに
としへにけりといかてしるらむ

宇都宮神宮寺廿首哥

平秀政

374 すみよしのまつはかきりもなかりけり
はまのまさこのかすにまかせて

住吉社にまいりて

藤原親朝

375 しきしまや山としまねはすみよしと
さためて神もあとやたれけん

百首哥中に、社頭月

藤原泰綱

376 をしほ山松もひさしき神代より
かはらぬ月のかけそのとけき

藤原景綱

377 あとたる、神のちかひやか、るらん
あふくみやまのあきのよの月

検非違使になりて、白襖始に

「八五

鹿島社にまいりてよみ侍

藤原時朝

378 ゆふたすきかけていのりし白妙の
そてにもけふはあまるうれしさ

五位尉になり侍て宇都宮に

まいりてよみ侍

379 しめはふるあけのたまかきうつりきて
なをいろまさるわかたもとかな

宇都宮神宮寺廿首哥に

謙基法師妹

380 ふたつなきみつなきのりのたまかつら
神もこゝろにかけてあはれめ

題不知

丹波忠茂朝臣

381 おほえ山むかしのあとのたえせねは
あまてる神もあはれとやみむ

円勇法師

382 ちはやふる神のみむろのみしめなは

「八六

くる人ことによをいのるかな

日光山にまうて、

浄意法師

383 なにことを松のあらしもおもふらむ

をりくた、く神のよりいた

三島社にまいりて

空寂法師

384 くまもなき月をみしまの山風に

よをうき雲はのこらさりけり

尺教

やそちの賀し侍けるに

蓮生法師

385 たき、つきてふたちとせにも成ぬれば

そらもけふりとかすむはるかな

左京権大夫信実朝臣

386 かすむ夜もこのはかくれににたる哉

わしのみやまのはるの月かけ

権中将光成朝臣

387 わしの山つねにすみけるかけなれば

かはらすみゆるはるのよの月

左近中将為教

388 たえすすむおもかけ見せてきさらきや

をなしむかしのもち月のそら

藻壁門院但馬

389 ゆくみちをおしふるのりのなくはこそ

ひみつの河のなみにさはらめ

普往生観の心を

権律師頼観

390 ゆきやすきみちとしりぬるこゝろこそ

やかてうきよのほかにすみけれ

聞一解悟百千門の心を

信生法師

391 うくひすの春をつけ、るひとこゑに

さとひらくる花のいろく

光明宝林、演説妙法の心を

392 このまよりもりくる月もまつかせも

こゝろすゝむるゆふくれのそら

耆闍流通の心を

蓮生法師

393 みやまにもをなしにほひに咲にけり

みやこの花のいろもかはらて

在、諸仏土、常与師俱生の心を

394 おしへをく露のかことをたよりにて

ひとつくさ葉にやとる月かけ

下品下生の心を

395 みちもなくわすれはてたるふるさとを

月はたつねてなをそすみける

入於深山思惟仏道

396 ふみなれしうき世のあととはたえはてゝ

みちなきやまにみちをたつねむ

日想

権少僧都明愉

397 山のはの入日にむかふゆふくれは

たのむひかりのさすかとそみる

空花の喩を

証観法師

398 いかなれば花とはみけむしらくもの

みねにわかるゝいろそむなしき

心観第六卷に、初果猶未断

の心を

西円法師

399 あかつきはほのかにのこるともしひの

きえなむとてやひかりそふらむ

日光山にて、又如浄明鏡悉

見諸色像のこゝろを

権律師謙忠

400 くもりなきおなしかゝみにみる人の

おもひくゝのかけそかはれる

我宿何罪生此惠子の心を

藤原時朝

401 いまさらにみぬさきのよのつらき哉

さらすはかゝるものはおもはし

説是語時無量寿仏住立

空中のこゝろを

402 ほとゝきすかたらひいつる雲まより

かけあらはるゝありあけの月

六道輪廻の心を

仏也法師

403 うきよにはいまいくたひかむまるへき

これをかきりのわか身ともかな

人命不停過於山水

404 山河のなかれてはやき水よりも

とまらぬものはいのちなりけり

題不知

平忠幹

405 さとりいるまことのみちはひとつにて

まとふにおほきのりの門かな

松島の見仏上人に法花経

うけ侍て、この縁によりて

後生にかならずあひたてま

つらむとてかへり侍けるに、

かの上人のもとより

406 なかきよのやみにもまとふ身なりとも

ねふりさめなは君をたつねん

返事

蓮生法師

407 やみちにはまとひもはてしありあけの

月まつしまの人をたのみて

藤原時朝あまたつくりたてま

つりたる、等身の泥仏をおかみ

たてまつりて

浄意法師

408 君か身にひとしとき、し仏にそ

こゝろのたけもあらはれにける

返事

藤原時朝

409 心よりこゝろをつくるほとけにて

わか身のたけをしられぬるかな

鹿島社にて唐本一切経供養

し侍ける時、ひころはあめや

ます侍けるか、今日しもそらは

れてことゆへなく供養とけ

ぬる事とて、導師

権僧正隆弁

410 今よりやこゝろのやみもはれぬらむ

神代の月のかけをうつして

返し

藤原時朝

411 ちはやふる神よの月の

あらはれて

こゝろのやみはいまそはれぬる

(三行分空白)

「 五四

新和調集卷第六

離別哥

あつまへくたり侍けるに、みち

よりつかはしける

浄意法師

412 しるらめやわかのうちをたちわかれ

ともなしちとり雲になくとも

返し

京極入道中納言

413 今はとてたちわかるなるうらかせは

かへるなみともえやはまたる、

もとはみやこの人の下野に侍

けるか、あからさまにのほりて

くたりけるに申つかはしける

惟宗行経

414 すみわひしものみやこをわするなよ

今はあつまの人となるとも

百首哥に、別

藤原泰綱

「 九五

415 ひとすちにゆくをわかれといひもせし
とまるもをなしなこりならずや

宇都宮にくたりて侍けるか、

あかつきはた、むとての夜、

人／＼なこりをしみ侍けるに、ほと

なくあけにければまかりたち

て、みちより

藤王橋下傀儡

416 あかつきのつらさはいつもならひにき
あやなかりつるよはのほとかな

京よりくたり侍けるに、池田

の傀儡かめつるきせかは

まであひつれて侍けるか、それ

よりかへし侍とて

藤原時朝

417 なれきつるそでのわかれの露けきは
かたみにかゝるなみたなりけり

さくり題に、別を

418 かへりこむほとしもあらしたかさこの
まつとないひそこゝろつくしに

照因法師

あひかたらひて侍ける女を、出

家の、ちおやのもとへつかはし

侍けるとき、て、申つかはしける

信生法師

419 かきくらしゆくそらもなきわかれ哉
とまるもとまるこゝろならしを

返事

蓮生法師

420 いまさらにわかるとなにか思ふらん
われこそさきにいゑはいてしか

蓮生法師

京へのほりけるに

申つかはしける

藤原時家

421 わきてよのわかればかなしもろともに
おいてはすゑののこりなければ

藤原時家

おいてはすゑののこりなければ

羈旅哥

大番はて、くたり侍けるに、白

川の花のこすゑみすてかたく

おほえければ

平光
(ママ)

422 白川のこすゑにとまるこゝろかな

みやこをいつる春のあけほの

嘉禎四年春のころ將軍家

御上洛の時、供奉し侍ける

に、はまなのはしにてよみ侍る

藤原時朝

423 たちわたるはまなのはしのあさ霞

みてすきかたし春のけしきは

藤原景綱百五十番哥合し

侍けるに、羈中嵐

証定法師

424 たひころもかさなる雲はとたえして

あらしをわくるみねのかけはし

旅夕

淨意法師

425 なるみかたしほのひるまをまつ程に

ゆきやらぬみちに日ぞ暮にける

旅泊重日といふことを

仙風法師

426 けふも又むこやまをろしうみふけは

いなのみなとになをやとまらむ

藤原時朝五十首哥に

藤原基政

427 かち人はあかつきことにいそけとも

やとにさきたつゆふくれそなき

修行し侍けるに、やつはし

の木のかけにおりゐて、か

きつはたをよみ侍ける

信生法師

428 かきはたよゝをひさしくへたてゝも

むかしのあとのいろそのこれる

信生法師にあひつれて侍
けるか折句によみ侍ける

西音法師

429 かくしつゝきえもやられぬつゆの身の

はてはいかなるたひにかあるらむ

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原時家

430 はるくどさやのなか山なかき日に

こえてもとをきあつま路のすゑ

素暹法師

431 こえなはと思ひしみねにきてみれば

なを行すゑもやまちなりけり

題不知

蓮生法師

432 いしふまむあそのかはらに行くれぬ

みかほのせきになをやとまらむ

藤原泰綱

433 たひ衣あさたつのへのしらつゆの

をきてや袖のぬれまさるらん

法眼円瑜

434 草まくらふたゝひむすふやともなし

そこらたひねのかすはつもれと

野旅 源親行

435 むさしのやおちて草葉になをそをく

わけ行人の袖のしらつゆ

旅月 藤原景綱

436 月にこそやともさためすあくるかな

よるはこえしとおもふやまちを

旅関月 座蓮法師

437 秋しもあれみやこをいてゝあつま路や

きよみかせきの月をみるかな

旅宿惜月 藤原朝氏

438 あつまちはみやこひしき旅なれば

いるかたしたふありあけの月

百首の哥中に

円勇法師

439 行かへるくもゐのかりにことつてむ

みやこはとをきつほのいしふみ

冬朝旅

念生法師

440 しもむすふのちのさ、はらふみわけて

あさたつたひの袖そさむけき

題不知

藤原景綱

441 すゑとをきいなさ、はら行くれぬ

あらしをさむみやとはなくして

藤原頼業

442 かたしきの袖のなみたのいかなれば

くさのまくらもうきしまかはら

信生法師

443 草まくらいゑちをなにかいそくらむ

ふるさととてもかりのやとりを

祖父の配所へおもむき侍けるに

中山といふ山をこゆとて

「 1011

蓮生法師

444 行すゑもおほつかなきをいかにして

しらぬやまちをひとりこゆらむ

旅宿松風

照因法師

445 こけふかきいはねかたしく袖のうへに

なれぬみやまのまつかせそふく

証定法師

446 ゆめのうちはいつくもおなしたひなれば

さむるうつ、のみやこそそまつ

哀傷

尾張権守藤原経綱、すみ侍

ける人身まかりてのち夢に、

なもあみた仏といふもしを

はしめにおきて哥をよみて

とふらへ、と見侍けると聞て

よみておくりける

冷泉前大納言

「 1014

447 みしはうくきくはかなしき世の中に

たへていのちのうたてのこれる

権中納言

448 ふかゝりしちきりのほとをおもひかは

あさからすとはなみたにそしる

右兵衛督

449 ついに行みちのしるへとたのむかな

すゝむる夢にむすふちきりは

左京大夫信実朝臣

450 もらすなよちひろのそこはおもくとも

ちかひのあみのうけにすくひて

左中将光成朝臣

451 なかめつるはなもうき世のいろなれば

ちるをわかれとなをしらせけり

中務大輔為継朝臣

452 つてにきくみのりのうみはふかくとも

なをゆきやすきかたをたのまむ

法眼円瑜

453 なにとしてをくれさきたつならひのみ

さためなきよにかはらさるらん

蓮生法師

454 あはれなをとまるいのちもある物を

かはるならひのなとなかりけん

藤原泰綱

455 身のうさもつらさもひとつわかれにて

おもひとくにもねはなかれける

藤原頼業

456 ふしておもひおきても夢の心地して

うつゝならてもよをすくすかな

藤原時朝

457 ありてうき身はなからへて世中に

おしみし人のわかれをそおもふ

藤原経綱

458 露のみのきえにしあとのわかれには

ぬるゝたもとそかたみ成けり

藤原時光

459 みし人のなきをゆめとはおとろかし
あるもうき世のうつゝならねは

藤原景綱

460 なにかその人のあはれもよそならむ

うきよのほかのすまぬ身なれば

一首によみておくりける

平長時

461 なもあみたほとけといまはちきりても

うきよのゆめをおとろかすらむ

昔あひしれる人のもとより、

なくなれる人のかすをしるし

ておこせ侍ける返事に

浄意法師

462 みし人のなきをしらてそやみなまし

うきはみやこのたよりなりけり

壬生二品身まかりぬときゝて、

たよりにつけて申つかはしける

463 いかはかりかつなけくらむよそにたに

みしおもかけのさらぬわかれを

返事

侍従隆祐朝臣

464 今もなをなけきをさらぬわかれかな

みたれす見えしおはりなれとも

あひともなひたりける女、わつ

らふ事大事になりてほか

へうつり侍ける時、をりから

しくれのし侍ければ

平経時

465 おもひねのなみたあらそふはつしくれ

いつれかまつはそてぬらすらむ

題不知

藤原頼業

466 わかれにし人のかたみのゆふけふり

いかなるかたの雲となるらむ

父信生身まかりたりける

のちのわさし侍りて、あした

によみ侍

藤原時朝

467 たきすてしけふりもいまはたえねとも

けたぬおもひは身にのこりけり

武蔵守平経時の室身まか

りにけるころ

蓮生法師

468 たれよりもこゝろやすしと思しは

まさるなけきのふかきなりけり

としころあひなれける男

まかりてのちよみ侍ける

尼西蓮

469 わかれてはなからふへきもなかりしに

あれはあらるゝうき身なりけり

母の身まかりけるに、念仏すゝ

めておもひのことくおほりとけ

侍ぬ、ときゝて申つかはしける

左京権大夫信実朝臣

470 をしへやるみちをまこと、おもふにも

こゝろやすくそ人はさきたつ

返事

蓮生法師

471 行やすきみちにも人をさきたてゝ、

あとをたつぬるほどそかなしき

五十日逆修とけ侍りて、ほか

所などしたゝめをくよし申

つかはしけるつゐてに

472 しはしなをこのよにありと見きくとも

とはゝむかしのあとゝたつねよ

返し

九条三位

473 きみはよしさてと、まらはわかれちに

われそさきたつあととはれん

題不知

信生法師

474 おもひいつることのはにをく露の色を

いつくのくさのかけに見るらむ

「二三

あつまよりあひくして侍ける

女、京にてはかなくなりける

のち、かのおとこひとりくたり

たるとき、て申つかはしける

475 なき人のかけやは見へんいはし水

またあふ坂の関はこゆとも

武蔵守平経時の室身まか

りにける中陰にこもりて、

九月十三夜にあめのふり

けるに、人のもとへ申つかはしける

藤原時朝

476 ものおもふこのさとはかりかき暮て

ほかにや月のさやけかるらむ

長門守藤原時朝、女にをくれ

て侍けるころ、人くゝに無常十

首よませけるに、

寄雪無常

「二三

浄忍法師

477 ひさかたのあめにましりてふる雪の

しはしあるへきよとはたのます

寄露無常

西音法師

478 つゆむすふくさはをわくるたひ人も

をくれさきたつみちやしららん

寄雲無常

479 わかれにしこ、ろよいかにあまくもの

よそにきくたにそてそしほる、

寄花無常

源頼明

480 なき人のかたみにしのふさくら花

わすれてすきよはるの山風

若松の禪尼の四十九日卯月

の六日なりしに、けふはみな

きみしのひねをなく人も

しらすかほなるほと、きす、と申

「二三

つかはしたりし返事に

藤原景綱

481 けふのわかれこゝろをしらはほど、きす

しのはぬほと、のねをそなかまし

母の服に侍ける五月五日に

よめる

浄意法師女

482 すみそめのそてになみたのかゝる哉

さつきのたまをよそになしつゝ、

題不知

蓮生法師

483 おもへたゝ、さらてもいそくみちに又

さきたつ人をしたふならひは

人の後生とふらへと申たり

ける返事に

484 とまりゐはとふへきものとおもひしれ

たかさきたゝむことはしらねと

はかなくなりける人の

はかにまかりて

藤原朝基

485 なき人のおもかけとまるあとにきて

けふはたもとにつゆをかけつゝ、

題不知

平光幹

486 風にちる花よりも猶はかなきは

をしみし人のいのちなりけり

藤原朝氏

487 おほかたのはかなき世をはなけゝとも

身のうへしらぬわかなみた哉

竹御所かくれさせ給てのち、常

の御所にまいりてよみ侍

藤原重頼女

488 いかはかりなみたもちりもつもるらん

君なきとこのふるさまくらに

武蔵守平経時の室身まか

り侍けるころ

藤原泰綱

489 ゆめとのみ思てたにもなくさまむ

みしおもかけのうつ、ならすは

題不知

想生法師

490 しかりとてゆめとはいか、たのむへき

うつ、はかなきよとはおもへと

藤原基氏

491 われはまたたかねさめにかかたられん

こよひも人をゆめにみるかな

藤原親朝

492 はかなしやうつ、はいつのならひにて

さなからゆめのよをなけくらむ

良空法師

493 まほろしのあるかなきかの世中は

うつ、すくなきゆめにそありける

百首哥に

有尊法師

494 くれ竹のみしかき夜半の夢よりも

みはてぬものはうつ、なりけり

浄意法師

495 昔よりをくれさきたつならひあらは

わかれをさらになけかすも哉

女のおもひに侍けるころ、同し

おもひなる人とふらひける

かへりことに

藤原景綱

496 おもひやれおくる、あとのこゝろをは

うかりし時になれてしるらむ

世の中さはかしくて人く

おほくうせにけるころ、よみ

侍る

藤原景家

497 いまさらにおとろく

へしやあたし世に

たとひいかなることを

(四行分空白)

聞とも

新和詞集卷第七

恋哥上

百首歌中に、初恋

藤原景綱

498 見ぬ人のうはのそらにもこひしきは

なにをたよりのこゝろなるらん

宇都宮神宮寺廿首歌に

浄意法師

499 ゆらのとをあさきりかくれこく船の

こひわたるとも人はしらしな

神行郊

500 君こふるわれとしらなむいはせ山

たにのした水のひくゝに

寄鳥忍恋

(上冊終)

二三

座蓮法師

501 あしひきの山ほとゝきすこかくれて

人にしられぬねをのみそなく

寄涙恋

平秀政

502 しのへともおさふる袖をもるものは

こゝろにあまるなみたなりけり

藤原景綱

503 しのふるもをなしわか身の心より

ほかなるものともるなみたかな

清原公高

504 おもふよりぬるゝは袖のならひにて

こひにさきたつなみたなりけり

百首歌に

仏也法師

505 なにゆへにつれなき人をうらむらん

おもひそめしはこゝろなりけり

座蓮法師

二

506 さてもなをしのはむとこそ思ひつれ

たかこ、ろよりおつるなみたそ

寄草初恋

藤原泰綱

507 あさちふのおの、しのはらたつねても

思^まあたりをいかてしらせむ

藤原時朝稲田姫社にて十首

哥講し侍けるに、欲言出恋

右大弁光俊朝臣

508 それをたにしはしやすめてなくさめむ

いはねはむねのさはくおもひを

題不知

高階重氏

509 あらいそのいはにかけこすしらなみの

くたけて人をこひわたるかな

蓮生法師

510 あきやまにしもふりおほふ紅葉はの

したこかれなるこひもするかな

「三

藤原親朝

511 おほひ河うふねにともすか、りひの

か、りとたにもほのめかさはや

大江経盛

512 かくとたにおもふこ、ろをしらせはや

さのみはいか、しのひはつへき

権律師隆快

513 いかにせむなみたのいろいろかひそなき

とへかし人のものやおもふと

平時重

514 行かよふ心はかりをしるへにて

しのふおもひをとふ人もかな

弥陀信法師

515 あらはれてたかなみたとかかこたまし

しのふにおつるつゆのしらたま

蓮生法師

516 いまはた、おもふ心をこりなく

しらするほとのことのはもかな

「四

藤原景綱哥合し侍けるに

橘友家女

517 さえゆけはなみたもこほる冬のように

ひとりかたしく袖をみせはや

題不知

藤原泰朝

518 ときしあれははるはこほりも消にけり

いつかは君かわれにとくへき

寄浪増恋

藤原泰朝

519 なとり河せ、にくたくるいはなみの

猶わきかへりおもふころかな

源親行

520 かきりあれはいはにくたくる白浪も

あらはれてこそつれなかるらめ

冷泉前大納言家に恋百首哥

たてまつりける中に

藤原時朝

521 ふく風のをとにたて、もしらせはや

のきはのおきのそれとはかりも

忍久恋

源宗景

522 としふともいろにはいてししくれつ、

くもゐる山のみねのときはき

恋哥よみ侍ける中に

浄意法師

523 こゝろにはしのふもちすりしのへとも

みたれにけりな袖のしらつゆ

牙^互忍恋

清原時季

524 もろともにしのふもちすりたか袖か

みたる、つゆのかすまさる覧

京極入道中納言定家に千首哥

たてまつりけるに、顕恋を

藤原時朝

525 しはしこそ袖になみたをつ、みしか

いまは人めにあまりぬるかな

寄涙恋

西入法師

526 いまはたゝ人めもしらぬなみたかな

しのふはこひのはしめなりけり

円嘉法師

527 いつまでかしはしなみたをせきとめて

うとき人にはなをしのひけん

富小路太政大臣家に百首哥

たてまつりける中に、

祈恋を

藤原時朝

528 なからへはつらき人にもあふやとて

おしからぬ身をいのるころかな

題不知

蓮生法師

529 いのりこしみむろのやまのくすかつら

かみをかけてもうらみつる哉

想生法師

530 あふことを神にそいのるさかきはの

ときはかきはに人をこふとて

鶴岳社十首哥に

藤原朝景

531 あふことはゐなのさゝはらいつとても

つれなきいろのかはるものは

題不知

藤原親朝女

532 あふせなきなみたの河にしつみつゝ

深くものをおもふころかな

藤原言盛

533 身をなけてあふせもあらはなみた河

いきておもひにしつまさらまし

坂上道清

534 わか袖はみわたになひくうき草の

うきあたたなみのかけぬまそなき

衣笠内大臣家へたてまつり

ける哥中に

藤原時朝

535 なみた河みなどは袖のうらなから

わか身こかれてよるふねもなし

藤原景綱百五十番哥合に、

寄煙恋

源信行

536 消かへりあさまのけふりいたつらに

そらにのみしてたつわかな哉

藤原朝高

537 消かへるふしの煙のそらにのみ

うきておもひのはてそかなしき

丹波広長朝臣

538 しらせはやもゆらんふしの山よりも

なを身にこえてあまるおもひを

想生法師

539 きえよた、なひくかたなきゆふ煙

わか身あさまの名をたてぬまに

藤原親朝女

540 かやりひのゆくかたもなきけふりこそ

むせふおもひのたくひなりけれ

題不知

信生法師

541 ひかすのみつもりのあまのぬれ衣

かけてもいまはかわくまそもなき

大中臣光成

542 おもひかねよるのころもをかへしても

ねはこそ人をゆめにたに見め

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原時家

543 ち、わくに思ひみたる、かたいとの

あふ事をなみ年そへにける

素暹法師

544 つれなさをうらみよとてやときは山

したはふくすに風のふく覧

題不知

長円法師

545 つれもなき人をはいはずあはれとも
うしともなにをうらみ初けむ

藤原景綱

546 つれなきをわか身のうきにしりながら
さはなしはですうらみさるらん
547 あふまてとこふるもたれかためなれは
いのちにかきるものおもふらむ

源頼明

548 こひちにもしほるしほりのあとしあらは
おもひいるともまとはさらまし

素暹法師

549 まよひゆくすゑはいかにとたふへきに
わかこひちにはあふ人もなし

大江季房

550 年月は越てゆくともあふ坂の
関のこなたにおもひくるしさ

寄花不逢恋

藤原蔭清

551 つれもなきこゝろの花のしたひもは
はるまちえてもとくるものかは

坂上道清

552 いかにして花のしたひもとけぬらん
はるもつれなき人のこゝろを

平尚時

553 わかやとのさくらひとときの花ならば
つれなき人もたつねきなまし

宇都宮神宮寺廿首哥に

浄忍法師

554 せめてわれつらきはさきのむくひにて
こんよとたにもちきりおかはや

藤原基隆

555 こひしなんのちにあふよのあるへくは
なををしからぬいのちならまし

題不知

平忠幹

556 こひしなむのちのむくひはある物を

あふにかへたるいのちならねは

藤原泰朝

557 しらさりきあひ見るほとのかなしさに

のちにはものをおもふへしとは

浄意法師

558 むくひあらはわれもつれなき身と成て

こんよも人にあはしとやす

平道好

559 かくはかりおもふといふをたのまぬは

たれにつらさをならひそめけむ

権律師謙忠

560 なをさりのときや人めをつゝみけむ

けにおもふには身をおします

寄夢恋

清原時季

561 うつゝにはあふことかたしむはたまの

ゆめにもせめて見るよしもかな

寄衣恋

清原時高

562 かへしてもなにゝかはせむさよころも

あひみることのうつゝならねは

清原光定

563 こひ衣なかゝ袖のくちねかし

あるにそつもる露もなみたま

百首哥に

藤原泰綱

564 かくたのむうつゝを身にはならはねは

あふよをなをもゆめとこそ見れ

不遇恋

浄意法師

565 ひとすちに夢をまつこそはかなけれ

かならずしもやあふと見るへき

藤原時朝五十首哥に

藤原基政

566 しきたへのまぐらのちりと成にけり

としへてあはぬこひのつもりは

恋哥中に

源長継

567 ちりならぬなはたちなからあふことの

むなしきとこをはらふあき風

秋夕恋

西円法師

568 わひはて、またしと思へはひくらしの

なく夕くれにあきかせそふく

題不知

藤原親朝女

569 いたつらになかむるくれもある物を

まつをくるしとなにおもふらん

藤原泰家女

570 ちきりおきしけふはその日に成ぬれと

なを夕くれをまつそくるしき

藤原基隆

571 たれにかもことつてやりておほともの

みつのはまなるまつといはれん

待恋哥とて

顕信法師女

572 いつはりの昨日のくれにこりもせて

こよひのそらもなをまたれつ、

寄月恋

平忠幹

573 いまさらに月夜よしとはなかくても

つれなき人をいかにたままし

権律師隆快

574 いまこんとたのめしくれの秋のそら

ひとりも月のふけにけるかな

蓮生法師

575 こぬ人をまたせくゝて月かけの

いりなむとするそらそかなしき

源長継

576 わひつ、もねなましよはの村時雨

くもりもはてぬ月もうらめし

577 やとりこし袖にもうとくなりにけり
なみたにくもるよはの月かけ

藤原俊定

始逢恋

「一六

578 こよひこそあふくまかはのみをつくし

浄意法師

くちぬる袖のほとのみゆらん

寄枕恋

証定法師

579 こよひさへまくらのちりをはらはてや

道阿法師

580 にるまくらこよひよりこそすかのねの
なかきちきりをむすひそめつれ

寄錦恋

大江季房

581 むすひおくちきりありてやおくるまの
にしきのひものけはしめけむ

寄鳥恋

藤原景綱

582 こひくゝてまれにとけぬる下ひもの

夕つけとりのねこそつらけれ

宇都宮神宮寺廿首哥に

藤原時家

583 あけぬとておなし心になくとりを

つらきためしとなにうらむらん

題不知

大中臣能範

584 あくる夜をつくるやこゑのこの

かへらんとするそらそかなしき

寄鳥別恋

藤原泰綱

585 しのゝめのあるわかれのねにたて、

たかなみたとかとのなくらん

暁恋を

藤原真義

「二〇

586 あふさかの夕つけとりもあかつきの

わかれをたれになきはしめけむ

権律師頼観

587 まちわひてうらみなれにし鐘の音は

あふよもつらしあかつきのそら

照因法師

588 うきものといひしは人のよかたりの

おもひしらるゝあかつきの空

藤原朝忠

589 うきものとき、おとろかぬあかつきの

かねのをとこそ身にしられけれ

法眼円瑜

590 うき物とさしも思はぬありあけの

月はいまこそ身にしられぬれ

藤原親長

591 いまそしるうきあかつきのならひとて

わかるゝそらのありあけの月

西善法師

「三

592 あかつきはかねて思しつらさにも

なをあまりぬる袖のつゆかな

藤原重頼女

593 うきものと夕つけとりのねにたて、

こぬよはかりそしのゝめのそら

後朝の恋を

藤原重継

594 あざつゆのおきてわひしき別かな

いかにたえてかくれをまつへき

(五行分空白)

「三

新和歌集卷第八

恋歌下

宇都宮神宮寺廿首哥に

素暹法師

595 君をわかおもふこゝろのいろならば

ちしほやちしほそめて見せまし

平光幹

596 かすかの、わかむらさきの色にいて、

ふかくも人をおもひそめつ、

朝恋を

藤原公綱

597 見せはやなけさわかきつるみちしはの

露よりもろき袖のなみたを

寄源氏恋

有尊法し

598 物おもふなみたの河のはやきせに

身をうきふねそひとりこかる、

寄河恋

源宗景

599 なみたのみなかれてふかきおもひ河

あふせは人のこゝろなりけり

平幹繩

600 ひにそへてなけくまさるなみた河

いと、あふせもたえやはてなん

平幹時

601 あざきせもありてふ物をなみた河

ふかきおもひにしつむころかな

題不知

藤原朝基

602 いまさらにぬるらん袖もたのまれす

われそつらさのねをのみはなく

冷泉前大納言家に恋百首哥

見せたてまつりける中に

藤原時朝

603 人こふるなみたのいろにあらはれて

からくれなるに袖そなりゆく

あひしれる女のもとへきる

へき物なとつかはしたりけるに、

さらすともとてかへしたり

ければ

信生法師

604 ちきりしをおもひかへすかさよころも

さてやうらみのつまとなりなん

女かへし

605 せめてなをあかぬなこりにさよ衣

ゆめにみゆやかへすはかりそ

寄夢恋

藤原景綱

606 うつゝとてないうつりかののこるらん

見しよは夢のちきりなりしに

浄意法師

607 あふことのうつゝはゆめになりゆけと

夢はうつゝのこゝちやはする

源長継

608 うつゝにてうかりしものそゝのまゝに

見えつるよはの夢もうらめし

坂上道清

609 をのつからあふとみしよの契にて

ゆめよりほかはおもひてもなし

証定法師

610 わひぬれはゆめてふ物をたのみても

ねられぬよはそかひなかりける

寄月恋

藤原時朝

611 ありあけのつれなき月もかたふきぬ

人のこゝろをいつとたのまむ

稲田姫社十首哥に、不知在所恋

藤原蔭清

612 しかすかにとへはこたふる山ひこの

すみかをいかてしらせさるらん

隔恋

坂上滋家

613 あしかきのつらき隔のなかりせは

見てもこゝろのなくさみなまし

宇都宮神宮寺甘首哥に

謙基法師妹

614 うみやまのとをきへたてもなかりけり

人のこゝろのかよふなには

近恋

大中臣能範

615 伊勢のうみしほのみちひのめのまへに

かはるはひとのこゝろなりけり

九条内大臣家に三百六十首

哥たてまつりけるに

藤原時朝

616 しほむかふおきつふな人こさまよひ

あはれゆかれぬこひのみちかな

題不知

証意法師

617 風ふけはあらいそなみのうつせかひ

こゝろくたけてあはぬこひかな

隔山恋といふ事を

平光幹

618 いてぬまの月にこゝろやなれぬらん

やまのあなたの人をこふとて

恋哥中に

清原時季

619 雲まよりほのかに見ゆる三か月の

われのみものをおもふころかな

くれをたのめてこさりける

女のもとへ、いさむる人ありと

きゝて

信生法師

620 あまのはらよこきる雲や隔らん

そらたのめなるいさよひの月

たいしらす

蓮生法師

621 おもかけはなみたの露にうつりけり

見るも悲しきありあけの月

宇都宮神宮寺廿首哥に

源基氏

622 うき物となどわかたけになりぬらん

これも見しよのありあけの月

稲田姫社十首哥に

藤原朝景

623 つれもなき人のおもかけいくたひか
ありあけの月におもひいつらん

寄月恋

照因法師

624 おほかたの月にねぬよのまくらたに
さひしきものを秋のならひは

藤原景綱

625 なみたともしらしな月はわか袖の
つゆをはあきにおもひならひて

藤原頼業

626 ものおもふ袖やしくるゝわきてよも
なかむる山の月はくもらし

寄露恋

清原成朝

627 露ふかき秋の野はらの草のはを
よそにおもはぬ袖のうへかな

「三〇

信生法師

628 思あらはわけてもゆかんさくらあざの
おふの下くさ露しけくとも

旅宿恋

西入法師

629 おもひかねうちぬるとこのまくらとて
むすふ草はもつゆそこほるゝ

寄虫別恋

藤原景綱

630 あけたてはねこそなかるれせみのはの
ひとへにつらき袖のわかれに

寄鳥恋

藤原重頼女

631 あふことをおもひたえたるあかつきも
わかれしとりのねにそなかるゝ

秋恋

藤原重継

632 色かはる野はらの草の露見ても

「三一

ひとのこゝろのあきそかなしき

題不知

名忍法師

633 思かねまどろむほとはわすられて

つらきはよはのねさめなりけり

百首哥中に、寄身怨恋

藤原泰綱

634 うとくなる人はなか／＼つらからて

かへりて身こそうらみられけれ

夢中逢恋

藤原国弘

635 なけきつゝうちぬるとこにあふとみる

ゆめのなこりもおきうかりけり

稲田姫社十首哥、憑契約恋

西円法師

636 ねたくこそをなし心になりやらね

人のわするゝちきりおほへて

寄書恋

源宗景

637 かくはかりうはのそらなることのはを

たれかたのむのかりのたまつさ

信生法師のおこせたる

ふみのはしにかきて、女のか

へしける

638 はまちとりかよふかた／＼あまたあれは

ふみたかへたるあとかどそみる

寄鳥恋

導阿法師

639 水とりのなみたのたまもよなくは

うきねのどこになきあかしつゝ、

西円法師

640 かはと見は袖にもかよへさよ千鳥

人のふちせになみまなきころ

恋のこゝろを

浄意法師

641 たのまれぬとりとならはの契哉

まくらをたにもえやはならふる

藤原景綱

642 たまくらにつもるなみたもわたつみと

あれにしとこにうらみてそぬる

慶西法師

643 君をおもふ心のほとはわたつみの

ちひろのそこもなをそおよはぬ

女のもとよりいまはおもひも

いてし、など申たりける

返事に

藤原時朝

644 人はいさわればわすれしいもかしま

かたみのうらのありあけの月

寄松恋

有尊法師

645 いはしろの松もうらめしあはぬまの

ひさしかれとはむすはさりしを

藤原時朝十首哥よませ

ける中に

藤原泰重

646 た、ならぬゆふへのそらのけしき哉

思いて、も袖ぬらせとや

寄雲恋

647 わかこひはしのふの山にたつ雲の

きえてあとなきちきり成けり

怨恋を

丹波国長

648 ことのはのかれのみゆけはまくすはら

うらみにたえぬ露そこほる、

暮秋恋を

権律師隆快

649 秋はつるあらしの風にいかならん

わか身うきたのもりのことのは

百首哥中に

想生法師

650 君によりいまそしりぬることのはの

あきはてぬれはかるゝものとは

ひさしくをとつれさりける

女のもとへ、なかつきのすゑつ

かたにつかはしける

平時兼

651 ふきすくる風をたよりのおきのはの

秋はてぬとやおとつれもなき

哥合し侍けるに、冬恋を

藤原景綱

652 秋はてし心よりこそかれにけめ

ことのはにをくしもはあらしを

すみわたりける女、なかつきの

すゑつかたにもへまかりて、

いまはかへるまじきよし申

たりけるに、うつろへるきくに

つけてやりける

浄意法師

653 なかつきはあすをかきりと大きく物を

けふあきはつる人もありけり

女かへし

654 しらきくのうつろふ色をみするにも

あきはてけりとわれそしりぬる

題不知

655 をしからぬわかたまのをはなからへて

あひみしことそたえはてにけり

顕信法師女

藤原親朝女

656 あはれとはおもひもいてよはなかたみ

めならふいろにうつりはつとも

ひさしくとはさりける女の

もとより、信生法しに申つか

はしける

657 さてもさはかきたへぬるかさ、かにの

いかななるへきこゝろほそさそ

寄草恋

権少僧都明愉

658 たのめおきし秋やむかしの秋ならぬ

にはのよもきのもとに身にして

源光泰

659 おほかたの草はあきにあらねとも

わか身はかりの袖のしらつゆ

惟宗経光

660 かよひこしみちのしは草しけれど、

さらても人のあとしみえねは

清原公高

661 わすれ草さこそはいまはしけるらめ

おもひたへたるなかのかよひち

安部泰弘

662 やましろのとはれしこともかきたへて

なにはのあしのねこそなかるれ

藤原親朝

663 うき身をは思もはてぬ草の名の

人の、きはにしけるころかな

一三

題不知

藤原泰綱

664 なかれてのたのみも今はなかりけり

おもひたへにしなか、はのみつ

665 き、わたるなからのはしのあともなく

たへてひさしき身のちきりかな

信生法師

666 あちのすむすさのいり江のそなれ松

なれてうらみのとしそへにける

寄水恋

坂上家光

667 水とりのおりある池のうすこほり

むすひもはてすなかやたえなん

寄閑恋

藤原蔭清

668 あたちの、あたにも人をおもはぬに

ならそのせきの名こそつられ

住吉社哥合に、寄滝恋

一四〇

藤原時朝

669 思せくこゝろのたきのひまもなくて

たもとにおつるわかみなたかな

被忘恋を

浄意法師

670 たへはつる人のこゝろのみしかさを

わすらるゝ身のいのちともかな

宇都宮神宮寺甘首哥に

西円法師

671 こひしさのさても昔になりゆかは

わするゝほとのとしもへぬらん

百首哥に

藤原泰綱

672 あふことのとえし

ことのとへもせて

いのちそなかき

ちきりなり

けり

(四行分空白)

新和歌集卷第九

雑哥下

藤原時朝稲田姫社にて十首

哥講し侍けるに、社頭立春

右大弁光俊朝臣

673 ちはやふるこのやへかきも春たちぬ

ひのかはかみはこほりとくらむ

浄意法師

674 神垣やよるへの水のうすこほり

とくるもやすく春はきにけり

湖辺早春

橘公成

675 志賀の浦のみきはの水とけにけり

なみより春やたちはしむらん

下野国よりしはすのつこ

もりころにまかりのほり
侍て、あけはとく、など申つか
はして、まからさりければ

素暹法師

676 春かすみたゝ、はといひてこぬ人は
うくひすよりもなをまたれけり

むつきのはしめ雪のふる日、
藤原泰綱もとへ申つかは

しける

平長時

677 いまははやこのめも春の花のえに
おもかけ見するけさのしら雪

返事

藤原泰綱

678 春のいろあらはれにける花のねに
さきてもちらぬけさのしら雪

題不知

中原盛綱

679 おひらくのわか身につもるたくひかな
のころともなきはるのあはゆき

藤原景綱のもとにて題を

さくりて哥よみ侍けるに、

雨中若菜

藤原経光

680 ぬれくもなをやつまゝ、しはる雨の
ふるの、わかなときすきぬまに

藤原時朝在京の時會し

侍けるに

惟宗行経

681 かすかのはやまのふもとのちかければ
ひかけまちいて、わかなをそつむ

題不知

想生法し

682 さきそむるわかきの梅のゆくすゑを
おもへはをしきわかいのちかな

円嘉法師

683 おひらくのわかすむかたの池水に

ふるきの梅もかけやはつらん

鎌倉入道大納言家の月次御

会に、海辺霞

藤原泰綱

684 つのくにのなにはの春をみたせは

かすみたなひくうらのはつしま

宇都宮神宮寺廿首哥に

権律師謙忠

685 なにとなく身をしる雨に袖ぬれて

ほしこそあへねはるのゆふくれ

題不知

蓮生法師

686 おるてにも物うくもなしむらさきの

わらひも草のゆかりとおもへは

浄意法師

687 のきちかく春のすゝめのむつれきて

こそこのふるすのあともとむなる

藤原景綱

688 ことしより花さくそのゝも、ちどり

さゑつる春もみちよへぬらん

宇都宮神宮寺廿首哥に

平秀政

689 うくひすの花になくねの物うきは

かねてわかれのおほえやはする

西円法師

690 いかになっているををかをもしらぬ身の

はなをあはれとおもひそめけん

題不知

平幹時

691 あしをやま花やさく覧つくはねの

そかひにみえてかゝるしら雲

庭にうへたりけるさくららの、

ふる木になりたるをみ侍て

藤原時朝

692 うゑおきし花はふる木に成にけり

わかおいらくのほとそしらるゝ

故郷花

坂上道清

693 ふりにけるあと、も見えずさ、なみや

しかのみやこの春のはなその

閑居花

藤原景綱

694 さきなはと思ひし花のうつるまで

とふ人またてすくるはるかな

寄花述懐

弥陀信法し

695 憂世をはいとひはてんとおもふ身の

はなにこゝろのなをのこるかな

長円法師

696 世をうしと花も人めをいとひてや

わかすむ山のをくにさくらむ

古寺落花

大江季房

「四

697 かねのをともなみたもさそふはつせ山

はなちるころのゆふくれのそら

百首哥中に、更衣

蓮生法師

698 うつり行人のこゝろもしられけり

はるをわするゝ衣かへして

首夏

仙風法師

699 わかやとのふちさきぬれはほとゝきす

まつにこゝろをかけぬ日そなき

夕郭公

照因法師

700 まちわひぬさのみはいかにほとゝきす

夕へのそらのむなしかるらん

鶴岳社十首哥に、船中郭公

藤原時朝

701 かしまかたおきすのもりのほとゝきす

ふねをとめてそはつねきゝつる

「四

題不知

諦如法師

702 われのみとまちつるくれをほと、きす

またたかためになきてすくらん

称仏法師

703 さと、をき山のすその、ほと、きす

たかためになくはつねなるらん

五十首哥に、河夏

源長継

704 やましろのよとの河おさ袖ぬれて

入江のまこもいまやかるらん

河早秋

大江季房

705 なみのをともちかはるなりたなかみや

うちのわたりのあきのはつかせ

初秋風を

藤原朝基

706 いつのまに秋とていろのかはれはや

おきふくかせのけさは身にしむ

藤原時朝館にて題をさくり

て人く哥よみ侍けるに、

田家初秋

藤原蔭清

707 あしひきの山田のさなへとりもあらず

やかても秋になるこひくなり

田家秋を

浄意法師女

708 わかやとはいなはの風そおとつる、

あせのかよひちくる人もなし

野秋風

藤原泰綱

709 おく露のたま、くのへのくすのはに

うらかなしくも秋風そふく

父清原高経、宇津宮九日会

の頭のかりし侍ける程に、

いとまなきよしを人のもとへ

申つかはすとて

清原公高

710 しるらめやのへのうつらをふみたて、

こはきかはらにかりくらすとは

秋夕

坂上道清

711 世のなかのうければおつるなみたにて

かこつかたなきあきの夕くれ

西円法し

712 ものをのみなけかんためとなれるみの

かきりしらるゝあきの夕くれ

題不知

藤原重頼女

713 白露のおきところなきわか身哉

草のいほりもあきかせそふく

藤原景綱

714 草はのみ露けかるへきあきそとは

わかそてしらて思けるかな

信聖法師

715 秋の野にたかかるかやのなはをなみ

いふかすもなき草はなるらん

ひ(薄蕨)
す(薄葉)
清原公高

716 わかやとはのきはの山のたかければ

まちとをにのみ月を見るかな

鶴岳社十首哥、山路月

藤原時朝

717 あしからのやまのおのへのほりてそ

そらなる月もちかつきにける

名所月

蓮信法師

718 さへまさる月のかけをはしもとゆふ

かつらきやまによやふけぬらん

野亭月

藤原景綱

719 さとゝをき草のいほりに秋をへて

野へもはるかか月をみるかな

海辺月

720 よるなみのをとにねられぬ関守は
いく夜かすまの月を見みるらむ

関月

無量寿丸

721 きよみかたよせくるなみのいはまより
くたけてかへるよはの月かけ

渚月

源長継

722 秋のよの月すめとてやまつかけの
きよきなきさをあらふしらなみ

海上月

顯信法師女

723 浦風にやへのしほかほきりはれて
月をしるへによふねこくなり
ち(薄墨)
ま(薄墨)

藤原時朝の館にて正元々年

八月十五夜会し侍けるに、

池月を

浄意法し

724 みなそこにやとれる月をありと見て
とらはやとらんさるさはのいけ

旅宿月

西円法師

725 今はねてあけはとそらをまつへきに
たひなるよしも月のさやけき

寄月述懐

平忠幹

726 をのつからうき身も月はめてつれと
おひとなるまてよにはしられず
い

宇都宮神宮寺廿首哥に

謙基法師姉

727 昔見し人はいつくにかくるらん
ひとりくまなき山のはのつき

浄意法師

728 さひしとてわれさへやとをうかれなは
ひとりやすまむ秋の夜の月

題不知

弥陀信法師

729 わかあきとまちこし月を見るはかり

なみたに^よしはしくもらさらなむ

ものおもひ侍けるころ月を

見侍て

浄意法師

730 さためなきよにおもなれて秋の月

かはらぬかけのめつらしきかな

百首哥中に

藤原実好

731 月もまたわれをわするな秋をへて

見しはかりなるちきりなりとも

行円法師

732 すみく／＼てにしへ入ぬる月見てそ

このよにとまる身はうかりける

鎌倉三品親王家に三百

六十首哥たてまつり侍中に、

「 五

月前述懐といふ事を

藤原時朝

733 ありあけの月よりもなをつれなきは

うきよをいてぬわか身なりけり

旅宿鹿

坂上家光

734 草まくらならはぬ野辺のさひしさを

わするはかりにしかそなくなる

山家鹿

空寂法師

735 しかのねのき、すてかたき秋の夜は

みやまのいほにこゝるとまりぬ

田家鳴

藤原滋家

736 ねさめする山田のいほにきこゆなる

あかつきかたのしきのはねかき

題不知

藤原景綱

「 五

737 山さとのにはのみちはふみわけて
さらにとはれぬ秋そさひしき

藤原基政

738 もみちせぬときはの山にふる雨は

あきもみとりのいろやそむらん

蓮生法師

739 たにかけのいほりのしたのした紅葉

わかなみたにもいろやそふらん

慶西法師

740 きて見れはかさとりやまのかひもなし

しくれにぬれてもみちしにけり

信生法師

741 もみちは、しくれてふかくなりけり

こけのたもとそつれなかりける

百首哥中に

藤原泰綱

742 いたつらに秋はくれぬるなかつきの

そらにのこれるありあけの月

暮秋虫

清原貞高

743 くれてゆく秋はすゑの、まくすはら

うらみかほなるむしのこゑかな

九月晦日、鹿のなきけるを

きゝて

藤原泰重

744 くれてゆく秋のかきりををしみてや

をのへのしかのけふはなくらん

初冬を

名信法師

745 けさよりはおきのかれはに吹風の

またをとかはるふゆはきにけり

平忠幹

746 しろたへのふしのみゆきのけぬかうへに

又もふりしく冬は来にけり

河上落葉

藤原重継

747 みとりなるいろともみへすもみちはの
なかれてくるたけかはのみつ

藤原泰朝

748 たつたかは河せにたゝむなみのあやを
にしきになすはこのはなりけり

賀茂在忠

749 もみちはのなかれておつるたつた河
せきもとゝめぬみつのしからみ

冬山

西円法師

750 風のかすよそのもみちのいろたにも
見えすなりぬるときはやまかな

時雨後月を

藤原親朝

751 神な月しくれのあとのいたまより
おもはぬほかの月そもりくる

安倍資氏

752 ひきかへてしくるゝ峰のこのまより

なをかけさゆるふゆのよの月

有尊法師

753 吹はらふあらしの山の月かけに
しくれもはてぬむら雲の空

清原公高

754 村雲の月のあたりにのこるかな
又やくれむ冬のよのそら

九条前内大臣家に三百六十

首哥たてまつりけるに

藤原時朝

755 あらしには雲もたまらぬ冬のよに
いかにすみてか月のこるらん

河冬月

藤原泰重

756 みなと河にほのかよひち見ゆるまで
なみのそこにも月はすみけり

題不知

象観法し

757 むはたまのよるとはたれかわきぞめし

こほりのうへのふゆのよの月

玄長法師

758 かりのこすたまゝのあしもしもかれて
むれゐるとりのかくれかそなき

え(薄墨)
ま(薄墨)

暁千鳥

藤原公綱

759 あかしかた浦の松風をとさえて

ありあけのそらにちとり鳴なり

証願法師

760 あけぬるかふしの浦きり立まよひ

ちとりなくなるうきしまかはら

河水鳥

藤原泰綱

761 水とりのしたになかる、おもひかは

いかにくるしきねのみなくらむ

故郷雪

想生法し

762 はつ雪のふるさと人にこと、はむ

おもひやるにもあととありやと

雪のふる日、人のもとへやる

ふみをもてまうてきたり

ける、そのうへにかきつけてか

へしける

行円法師

763 ふる雪にふみたかへたるあとなれと

とはれかほなるにはのおもかな

海辺雪

生願法師

764 なるみかたおかのふるみち雪ふれは

なみまや人のゆき、なるらん

題不知

浄意法師女

765 くれはつることしのけふを身のうさの

かきりときかはうれしからまし

証定法師

766 心をはをくりむかへぬとしつきの
すゝろにたけて身はふりにけり

藤原時朝

767 昔おもふこゝろのそらのしくるゝは
わかおいらくのなみたなりけり

百首哥中に、暁を

権律師隆快

768 秋のしもにのてらのかねをまかへても
なをゆめふかしあかつきのそら

信生法師

769 すきにけるこの世の夢をおもふにも
のこりすくなきあかつきのそら

高階重氏

770 まとろまぬ昔かたりのなかき夜も
あかてことはのなをのこりつゝ、

館にて哥合し侍けるに、

月前鶏

藤原景綱

「六

771 月を見てふくるもしらす成にけり
あかつきとてそ鳥のなくらむ

関路暁

坂上道清

772 鳥のねにあげぬときけはあふさかの
関のとくらきすきのしたかけ

紀行宣

773 関の戸はあけやしぬらんあふさかの
夕つけとりはいまそなくなる

清原時季

774 関の戸もいまやあくらむあふさかの
ゆふつけとりのこゑしきるなり

宇都宮神宮寺廿首哥

素暹法師

775 あまをとめふなのりすらし浦風の
なこの入江にたつかへるなり

江船

照因法師

「七

776 みつしほのたよりをまちてなにはえの

あしまつたひにふねかよふなり

河船

西命法師

777 つなてひくこゑはかりしてみえぬ哉

きりたちこむるよとのかはふね

海路朝船人

藤原朝氏

778 きりはる、須磨のうらはのあさなきに

あかしのとよりいつるふな人

海夕船人

藤原景綱

779 わたのはら夕風あらしなみまより

見ゆるこしまによするふな人

海路夕煙 西円法師

780 こきよせよゆふひに見ゆる山もとは

とまりなれはそけふりたつらん

題不知 藤原基政

781 しほきこるあまのゆき、のあと見えて

うらよりつ、くやまのほそみち

海眺望

藤原時朝

782 はるかなるおきつこしまにたつ浪を

そらよりか、る雲かとそ見る

宇都宮神宮甘首哥に

高階重氏

783 みなかみにみなはさかまきおとたて、

をちくるなみのすゑそのとけき

淨忍法師

784 あらまし(ママ)こ、ろやすめしやまさとも

けにすむときはすみうかりけり

たいしらす

蓮生法師

785 いまさらにみやこへかへるこ、ろかな

しほのいほりに身をはと、めて

高階重氏

786 たにふかきいはほのなかのかひもなし
こゝろのおくそ身はかくしける

信生法師

787 あとたえていくよになりぬ白雲の
かゝるすまゐをとふ人もかな

豊原泰範

788 やまふかく思いる身はしほりせし
うきよにまよふ人もこそとへ

椎柴

源親行

789 くれゆかはたかしきすてゝあとに又
枝をりそへんみねのしゐしは

深夜松風

平時重

790 ねさめしてすゝろに物のかなしきは
ふけゆくよはの松かせのこゑ

百首哥中に

藤原泰綱

791 ふきしほるとやまの風はそれなから
のきはの松のをとそはけしき

鶴岳社十首哥に

792 やまさとのならひとしのふさひしさも
おもふにまさるみねのまつ風

藤原景綱

山家月

藤原国弘

793 山さとのしはのかこひもあれはてゝ
ねさめのとこに月を見るかな

題不知

西円法師

794 とをさかるつまきのみちにしるきかな
としへてすめは山もあせけり

藤原泰綱

795 おもひやるみやまのをくの秋のそら
また見ぬ月にすむこゝろかな

空寂法師

796 つらき身をわかこゝろさへすてにけり

みやまのをくにやともとめつゝ

山家秋

源宗景

797 みやまへやすみならひてもさひしきは

きりのはおつる秋のゆふくれ

源頼明

798 やまさとはうき世のなかのほかゝとて

すむかひもなき秋のゆふくれ

宇都宮神宮寺廿首哥

浄忍法師

799 うきよにてなかめしよりもさひしきは

草のいほりのあきのゆふくれ

武蔵守平経時の五室墓

所へまうてゝ、それより尾羽と

いふ山寺へまかりけるみち

にて

蓮生法師

800 見し人のすみける

やとをゆきすきて

たつぬるやまは秋のゆふくれ

(二行分空百)

新和調集卷第十

雑哥下

六帖題にて哥よみ侍ける中に、

日を

藤原時朝

801 いつるひのかたはあつまの山かつも

あふくは君かみかけなりけり

月

802 かさゝきのみねとひこゆるかす見えて

月すみわたる雲のかけはし

けふりのちかきほとにた

つをむつかしなど、ひとの
申ければ

藤原基綱女

803 いまさらにけふりをなにといふ覧

むろのやしまのちかきあたりに

むろのやしまへまかりあはん

と、人にやくそくして侍ける

か、さしあふ事侍て申つか

はしける

藤原親朝

804 けふりたつむろのやしまと思はずは

君かするへにならましものを

むろのやしま見にまかりて

よみ侍ける

藤原景綱

805 たへすたつけふりやむろのやしまもる

くにつみ神のちかひなるらん

源行宗

806 むかしよりたへせぬ物はしもつけや

むろのやしまのけふりなりけり

安部資氏

807 よそにきくむろのやしまをきてみれば

けふりはかりそ名にはたちける

清原成朝

808 よと、もにおもひのけふりたへすたつ

むろのやしまやわか身なるらん

宇都宮神宮寺障子哥に

京極入道中納言

809 たふのやまたのむをのへの身はかくて

はる日もさえぬふちのしほれば

遁世のこゝろさしある人の

僧綱になり侍るもとへ申

つかはしける

浄意法師

810 かのきしに心をかくるたよりにも

うれしかるへきのりのはしかな

返し

法橋道秀

811 と、こほることもなくてやわたりなむ

こゝろにかけしのりのはしをも

仁治三年大嘗会の寄檢

非違使つとめ侍てかへり

けるみちにてよみ侍ける

藤原時朝

812 よそに見しひかけのいとたまかつら

かけてそきつるおみのころもて

人〱の点あひたる哥みよ

と申ておこせたりけるを、かへ

しつかはすとて

浄意法師

813 うれしくもいまそたつねてみわの山

しるしのすきのしけきものとは

返し

寂身法師

「 六

814 人ことのやまとことのはたつね見よ

われのみしけきすきのしるしか

師匠のかきをきたる聖

教を見侍けるついでに

有信法師

815 をしへおくことのはなくはいかにして

昔のあとをおもひいてまし

たいしらす

藤原頼業

816 かすならぬ人にはよらし山ひこの

とを、はいかてこたへさるへき

藤原時家かもとへ申つかは

しける

蓮生法師

817 わするなよなかれのすゑはわかるとも

ひとつみやまのたにかはのみつ

返し

藤原時家

「 六

818 わかるともいか、わすれんみなかみは
おなしなかれの谷川のみつ

駿河国うとはまに、としころ
すみ侍けるか、うつの宮に
うつりゐてのち、かしこなる
人のもとへ申つかはしける

想生法師

819 いつかまたちかへりなんうと浜の
うとくなりにしあとのしら浪

題不知

蓮生法師

820 としをへてなれにしあとおもかけを
かたみに見よとたれと、めけむ

浄意法師家集を衣笠内

大臣家にみせたてまつり
たりければ、をくにかきつけ
て給ける

821 をしなへてふかきいろなることのはの

つゆさへ袖にかゝりぬるかな

藤原泰綱に古今かきてたひ
けるをくに、かきつけられ
ける

京極入道中納言

822 あとをたにありし昔と思いでよ
すゑの世なかきわすれかたみに

よみおける哥を人の
もとへつかはすとて

権律師隆快

823 をのつからこゝろにうかふうたかたの
きえすはありとかたみともみし

所望かなはさりけるころ

824 さりともとなをやまつへきあすか河

きのふもけふもしつむ身なれば

題しらす

平光幹

825 ゆくすゑもゆかしきほとそまたれつる

いまはうき身のなくさめそなき

藤原蔭清

826 ゆくすゑとおもひしことのつもりては

こしかたにのみなるそかなしき

有尊法師

827 なにとなきこゝろのうちのあらましも

なくさむほとそなくさまれける

稲田姫社十首哥に、

老後述懐

右大弁光俊朝臣

828 ものをのみうれへなげくとせし程に

むそしちかくもなりにけるかな

西円法師

829 はかなしなけふかあすかのよはひまで

あしたのつゆにかゝるこゝろは

百首哥中に

藤原泰綱

830 はかなくもうき身をしはしたのむ哉

あるにつけては世をもいとほて

831 いまはとてたゝひとすちのみちにのみ

おもふこゝろはさはらさりけり

題不知

有信法師

832 なにゆへにいまゝて世をはそむかぬと

とふ人あらはいかゝこたへむ

蓮生法師

833 つくくと思へはさてそのこりける

なを人かすにいらぬしるしに

834 うしといふみななをさりのことのはを

おもひしるにそ人はすくなき

835 いかなれはよのうきことにたゆる身の

のりのみちにはしのはさるらん

836 まことなきあらましことにあけくれて

いつかつきひのかきりなるへき

よをのかるへきよし申たり

ける人の、本意とけぬるよし

申つかはして侍ける返し
に

837 いろにいて、とはる、ほとになりにつり

あらましことのすみそめの袖

出家のこゝろさしあるよし
を、ちゝのかたへ申つかはす
とて

浄意法師

838 人しれぬこゝろのうちのあらましを

いつかころものいろにいたさん

返事

源有仲

839 むらさきもあけもみとりもそめてこそ

よにすみそめのはても見め君

藤原清定たつねまうてきて、

かはりにし世のこと、もよも

すからかたり侍けるつゐてに

浄意法師

840 あらぬよのむかしかたりをすみそめの
そてにもかはるいろそかなしき

返し

藤原清定

841 あめのよのむかしかたりのぬれころも

かさねてしほるわかもうらなみ

宇都宮神宮寺甘首哥に

浄忍法師

842 いまはわれたひともいはしあつまやの

まやのあまりにとしのへぬれは

題不知

浄意法師

843 吹まよふ風によこさるあは雪の

おもはぬかたにふるわか身かな

藤原朝氏

844 人の世もかくこそあれとなくさめて

うきをいとぬ身のすまゐかな

修行にいて侍けるに、母もなき

この、やつになりけるかいひ
おこせたりける

845 うらめしやたれをたのめとすて、行

われをおもは、とくかへりこよ

返し

信生法師

846 とりのこのひとりふるすにとまるとも

うきよにいか、たちかへるへき

いのちすつる事おほく

侍けるに、のかれていまゝて

はへりける事を思てよみ

ける

847 あたしの、かせにまかせし露の身の

いかていまゝ、てきへのこりけむ

出家の、ちふるさとかへりて

848 ふるさとのこのした露に又ぬれて

むかしにかへるすみそめの袖

六帖題にて哥よみ侍けるに、

「八五

墨を

円勇法師

849 するすみに衣をふかくそめながら

こゝろのいろはあさましの世や

宇都宮へくたりて侍けるか、

事のさうひありてまかり

のほらんとしけるに、なつの

ころ人のもとへ申つかはし

ける

藤原親教

850 うらみしよ人のあき風ふくなへに

ときをもまたてかへるくすのは

たいしらす

藤原時盛

851 世の中をうらむとしもはなけれども

身のうきときそなみたおちける

西円法師

852 草木にもおとりける身のはかなさは

「八六

「八七

はるをしらぬにおもひしられて

神阿法師

853 たにかけや人にしられぬむもれ木の

やかてくちなむことそかなしき

百首哥中に

藤原泰綱

854 さためなき世のことはりをおもふには

袖になみたそなをこほれける

源宗景

855 なみのうへにうきてたよふ水鳥の

をしからぬ身にねのみなくらん

藤原時朝、かしまのおきすの

社にまいりて彼社僧中に

十首哥すゝめ侍けるに

理然法師

856 うれはらやおきつしほあひにたつ波の

しつめかたきはこゝろなりける

題不知

親成法し

857 くれたけのよはうらむへきふしもなし

身をうくひすのねをのみそなく

清原時高

858 うきこともなからへてこそまさりけれ

つらきは人のいのちなりけり

平時重

859 いかにせむあるかひもなきよにふるは

こゝろにたかふいのちなりけり

良義法師

860 なかくに世にある人はいとへとも

かすならぬ身そつれなかりける

源基氏

861 いけるよりほかにはさして身のとかも

おほえぬものをうらみわふらん

大中臣能範

862 たらちねにわかれしころをかそふれば

をなしほども身はおいにけり

藤原時盛

863 たらちねのいさめしことをそむきしは
はかなきまでのこゝろなりけり

坂上道清

864 うしと見しむかしなれともいたつらに
すくるはおしきこゝろなりけり

大中臣能範

865 かしこきもうき身もをなし年月の
つもるはかりやかはらさるらん

藤原泰朝

866 うしとても又このころをなけかしよ
なをなからへはしのはれそせん

西命法師

867 うしと見し昔の世をはこひなから
またこのころをなにとふらん

香阿法師

868 かゝる身のうきをはしらて世中を
うらみてぬる、袖のうへかな

象観法師

869 おいらくのかけ見るたひにますかゝみ
うつしこゝろもなきわか身かな

藤原基政

870 ゆくすゑを思へはなになくへき
さすかたのみはある身なりけり

懐旧の心を

蓮生法師

871 故郷ののきのした草しけれども
かれにしものは人めなりけり

題不知

平忠幹

872 かすくゝにむかしのことはわすれねと
うきおもひてはあるかひもなし

大中臣景範

873 いつでもをなしうき身はかはらぬに
むかしはなとてこひしかるらん

源長継

874 うけかたき人となりけるさきの世の

身にはいかなるこゝろありけん

西円法師

875 むまれてもありけんものをいにしへに

あはすとなにか身をうらむ覧

「九三

(一行分空白)

目録

春	八十五首	夏	六十六首	秋	百十八首
冬	六十八首	賀	二十首	神祇	廿五首
釈教	廿七首	離別	十首	羈旅	廿五首
哀傷	五十首	恋上	九十七首	恋下	七十八首
雑上	百廿八首	雑下	七十五首		
已上七百七十二首					

作者 次第不同

鎌倉右大臣家 一首

衣笠前内大臣家 一首

冷泉前大納言為家 十一首

土御門大納言通成 一首

京極入道中納言定家 五首

冷泉侍從中納言為氏 三首

壬生二品家隆 二首

九条正三位知家 一首

右兵衛督教定 一首

右大弁光俊朝臣 五首

左中将経定朝臣 二首

左近中将為教朝臣 一首

權中將光成朝臣 二首

左京大夫信実朝臣 四首

侍從隆祐朝臣 一首 源有仲 一首

中務大輔為繼朝臣 一首 平経時 一首

平長時 二首 祝部成茂宿禰 一首

藤原泰綱 四十二首 丹波広長朝臣 三首

「九三

源宗景	大中臣景範	平幹繩	藤原俊定	藤原親時	丹波国長	藤原朝景	平忠幹	藤原時盛	藤原時光	藤原泰重	藤原行經	藤原清定	藤原基隆	藤原時朝	藤原時家	藤原賴業	丹波忠茂朝臣
十首	二首	二首	二首	三首	二首	八首	九首	六首	一首	五首	三首	二首	五首	五十一首	八首	十首	三首
源長繼	大中臣光成	平幹時	高階重氏	大中臣能範	藤原景家	平時重	藤原親長	平光幹	藤原泰朝	藤原重繼	藤原景綱	源信行	源孝行	藤原經綱	藤原親朝	藤原基政	源親行
八首	二首	二首	□首	十首	一首	五首	三首	□首	七首	五首	四十八首	一首	一首	一首	十四首	十二首	十二首
														一 四			
藤原公綱	藤原国知	清原公高	清原時高	藤原言盛	橘公成	藤原經光	藤原朝忠	安部資氏	藤原朝高	安部泰弘	藤原能季	藤原実好	藤原朝基	坂上滋家	坂上道清	藤原朝氏	源賴明
二首	三首	十一首	五首	二首	一首	二首	一首	一首	一首	三首	一首	二首	三首	四首	十六首	八首	三首
平道好	平秀政	大江季房	清原時季	藤原親教	豊原泰範	惟宗經光	藤原仲兼	神行郊	平時兼	藤原蔭清	賀茂在忠	藤原真義	源憲綱	平経成	坂上家光	源行宗	源基氏
一首	三首	五首	八首	一首	一首	一首	二首	一首	一首	□首	二首	二首	一首	一首	七首	二首	五首
																	一 五

平尚時	一首	大江経盛	一首	浄忍法師	九首	円嘉法師	三首
中原盛綱	一首	紀行宣	一首	座蓮法師	四首	照因法師	三首
源政家	一首	源光泰	一首	想生法師	十二首	道願法師	二首
清原政高	一首	清原成朝	二首	親成法師	三首	長円法師	一首
平朝定	一首	清原光定	一首	証觀法師	三首	覺願法師	二首
清原貞高	一首	無量寿丸	一首	仏也法師	三首	謙基法師	一首
僧行凡僧	次第不同			証意法師	二首	円智法師	一首
權僧正 <small>隆弁</small>	一首	見仏上人 <small>松島</small>	一首	弥陀信法師	四首	西仁法師	一首
法印長恵	一首	権少僧都明愉	四首	念生法師	一首	成願法師	一首
権律師謙忠	九首	権律師仙覚	三首	玄長法師	二首	仙風法師	三首
権律師隆快	八首	権律師頼観	二首	西善法師	二首	良空法師	一首
法眼円瑜	三首	法橋道秀	一首	空寂法師	三首	西音法師	四首
円勇法師	五首	導阿法師	三首	近阿法師	一首	名忍法師	一首
蓮生法師	五十九首	信生法師	三十三首	諦如法師	一首	称仏法師	一首
浄意法師	四十首	観念法師	一首	信聖法師	一首	名信法師	一首
素暹法師	五首	行円法師	四首	蓮信法師	二首	慶西法師	二首
証定法師	十首	有尊法師	八首	証願法師	一首	西命法師	二首
西円法師	十七首	西入法師	五首	寂身法師	一首	有信法師	二首

神阿法師	一首	理然法師	一首
良義法師	一首	香阿法師	一首
象觀法師	二首	生願法師	一首
女房			
弁内侍	一首	少将内侍	一首
藻壁門院但馬	一首	下野	一首
藤原重頼女	六首	信生法師女	一首
藤原親朝女	五首	浄意法師女	八首
橘友家女	四首	謙信法師女	五首
藤原基綱女	一首	藤原泰家女	一首
謙基法師姉	一首	謙基法師妹	二首
尼西蓮	二首	傀儡 <small>藤生</small>	一首
不知交名女哥	四首		一九
已上百八十六人			

(六行分空白)

(下冊終)

